御法主日顕上人猊下御言葉集

―宗旨建立七百五十年に向かって―

御法主日顕上人猊下御言葉集

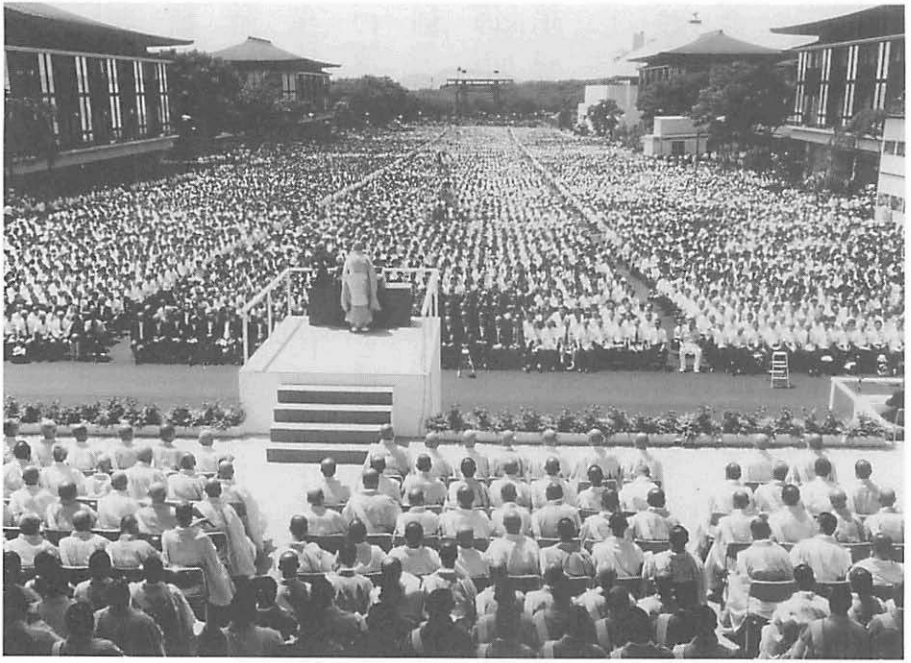
―宗旨建立七百五十年に向かって―

本書は「大白法」第五七四号から五七六号に奉載した御指南を一冊にまとめたものです

目次

地涌六万大総会の砌……5
訓　諭……6
三十万総登山への行業……8
地涌の菩薩の使命……11
奉安堂建立の意義……14
支部総登山について……20
信心即生活（一行一切行）……24
家庭訪問　育成……28

折伏行を実践……30
唱題行……36
誓願達成への祈り……50
講頭の責務……52
下種仏法（本門の下種折伏）……62
真の僧俗和合（布の縦糸と横糸）……68
創価学会破折……74
魔の用きを打ち破る……81
青年の信心……83
正しい筋道による前進……88
実践の決意……91
使命の自覚と遂行……93



三十万総登山の御指南を戴いた地涌六万大総会

地涌六万大総会の砌

最後に申し上げたいことは、大法広布は御仏意を拝しつつ、一歩一歩、確実に進展することが大切と思います。その一つの目標として、宗門は今より八年ののち、すなわち、平成十四年の四月に宗旨建立七百五十年の佳節を迎えます。その時、今日の集会の六万人の五倍、ないしそれ以上の信心篤き地涌の友が輩出すれば、一日一万人の参詣として、一カ月以上にもわたるであろう大法要を修することが可能であります。もって、広布の確実な進展とともに法界を浄化し、清気・清風を世に送り、国家社会の自他俱安同帰寂光の礎を建設することにより、広大な仏恩に報い奉るとともに、その実現に向かい、法華講の皆様の広布に対する偉大な実証を、本日よりの折伏大前進をもって顕していただきたいと思いますが、皆さん、いかがでありましょうか。

（平成六年七月二十四日　四一四号）

訓　諭

宗内一般

時正ニ宗門ノ重大ナル時機ニ鑑ミ　仏祖三宝ノ遺訓ヲ奉戴シ　日顕茲ニ宗内ニ対シ誠心以テ訓諭ヲ発令ス

惟ウニ野衲登座以来　一貫シテ唱導セル祖道ノ恢復　異体同心ノ確立　広布ヘノ前進ハ　下種本仏末法万年化導ノ意ニ則リ　真ノ人類救済世界広布ノ大願ニ基クモノニシテ　仏祖三宝ノ加護ノ下　仏敵魔鬼ノ団体ト化セル創価学会ノ邪悪ナル策謀ヲ時機ニ順ジテ適切ニ破砕シ　以テ宗内僧俗ノ道念ノ高揚　自行化他ノ増進ノ経過ニヨリ次第ニソノ成果ヲ挙グルニ至ル

所謂平成二年　同六年　更ニ本年ノ各総登山ノ達成ハソノ確実ナル実証ト云ウベシ　コレ正シク破邪顕正ノ浄行ニ対スル仏天ノ冥加ニシテ　ソノ不可思議ノ実相ハ一々ノ行業ニ顕然タリ

而シテ本年ノ僧俗和合ノ成果ニヨル新客殿落慶ヲ機トシテ　平成十四年ノ宗旨建立七百五十年ノ佳節ヲ望ムニ当リ　大法護持興隆ノ準備革進ハ弥々必

須ノ要件トナル

則チソノ第一ノ重大案件ハ本門戒壇ノ大御本尊ノ御遷座ニシテ　ソノ行事ハ既ニ本年四月五日断固トシテ執行ニ及ベリ　而シテ以後　更ニ下種本仏宗祖大聖人ノ大慈大悲ニ対スル報恩ノ為　宗旨建立七百五十年慶祝記念ノ法要ト　必要ナル諸事業ノ貫徹ニ邁進スベキナリ

即チ予テ提起セル法華講信徒三十万総登山完遂ノタメ　自行化他ノ折伏弘通ト　布教興学ノ充実　並ビニ堂宇建設　諸般ノ整備等ノ充足ヲ要ス

斯ノ綜合報恩大事業ニ当リ　宗内僧俗各位ニハ挙宗一致　一大勇猛心ヲ喚起シ　不惜身命護惜建立ノ志ヲ以テ之ニ当ラレンコトヲ庶幾ス

右　訓諭ス

平成十年十一月十三日

日蓮正宗管長　阿部日顕

（五一四号）

三十万総登山への行業

さて本年はいよいよ宗旨建立七百五十年の佳節に向かう出陣の年であります。平成六年の地涌六万総会に於いて標示した三十万総登山の目標に対し、昨年までの四年有余の期間は主としてその準備期間であったのに対し、本年よりの三年有余の期間こそ強力にその推進を計る実践の期間といえましょう。

その実践に当たってまさに眦を決すべき年こそ本年であります。蓋し出陣の最重要事は千万人と雖も吾れ往かんとの烈々たる気魄であり、それを裏付けるものこそ法界を貫く大正理による不屈の信念であります。

（平成十一年一月一日　新年の辞　五一六号）

◇　◇　◇

すなわち、今、我が宗門は本仏大聖人の唯一最高の仏法を戴き、衆生救済の大確信のもとに折伏大前進を進めつつあります。未来永劫への正法万年広布の道程において、来たる平成十四年の宗旨建立七百五十年の奉安堂建立、三十万総登山の大業こそ、本仏大聖人の仏徳讃仰、御報恩のため、また正法弘通、大法興隆による社会・国家・民心の善導と向上のため、特に根本的悪業をもって仏法を曲げている池田創価学会による社会の悪化矯正のため、さらには信徒

各位の福徳増進と現当二世の大願成就のために、まことに大切な大行事であります。

その完遂のため、来たるべき奉安堂着工法要より百日間の一日三千遍の唱題行と、一人が一人以上の折伏を、特に本年において敢然と実行してまいろうではありませんか。

（平成十二年四月六日　御霊宝虫払大法会の砌　五四七号）

◇　◇　◇

宗門の歴史を鑑（かんが）みるとき、創価学会が一時、宗門に関与した時期はありましたけれども、それ以外の時において、日蓮正宗の僧侶と法華講の方々が本当に僧俗一致し、手を握って、広布のためにこのような大前進を行い、その上から宗旨建立七百五十年の佳節に対する大事業を敢行しておるというようなことは、まさに総本山開創以来のことであります。

しかし、これはまた非常に大きな困難を伴うところの問題とも思うのであります。「三十万総登山」といい「奉安堂建立」といい、共になかなか容易でないという意味はたしかにあると思います。けれども、困難であればあるだけに、それに対して心を込め、また勇往邁進の気概をもってこれを完遂しきるところに仏法上の大きな功徳、また、それぞれの人々が受けるところの大きな御利益が必ず存すると思うのであります。

したがって本年一年において、今までの

努力をことごとく集約して明年の宗旨建立七百五十年の佳節に対する事業の総仕上げを行っていただきたいということを心から念ずるとともに、皆様の御協力と御精進を心から祈り、一言、開会に当たっての挨拶とする次第であります。

（平成十三年二月二十一日　第五回宗旨建立七百五十年慶祝記念局委員会の砌　五六八号）

◇　◇　◇

要するに、我々は「衆生所遊楽」を南無妙法蓮華経の受持、すなわち唱題を根本として、いかなる所においてでも必ずはっきりと対処し、どのような問題に対してでも自らの信心と境界において正しく裁き、正しく開いていくところに、自分自身の妙法蓮華経の当体たる命の確信が生ずるのであります。

皆様方がこの確信を持った時、その時こそ、その確信をもって人に向かって「この妙法を信ずることによって必ず幸せになれます。ほかのあらゆる宗教は全部、本当の中道ということを、いわゆる人間の命の真実の姿を顕すところの道を説いていません。したがって妙法を信ずる大聖人様の仏法のみが、この道を示しておるのです」という境界において、人々を導く確信を持つことができると信じます。

皆様方、本年はいよいよ明年の「三十万総登山」に向かっての最後の締め括りの年であり、また、それを貫徹するところの年であります。

本日のこの総会を契機に、お帰りになりましたら、いよいよ唱題を根本として、多くの人々を一人でも救っていっていただきたいと思います。先程の石毛大講頭の話にもあった、「三十万総登山」達成に向けての折伏は、今回、ここにお集まりになった二万五千の方々が中心となって、法華講員の一人ひとりが一人の方を、つまり一世帯を折伏するならば、必ず「三十万総登山」の達成として明らかに成就するのであります。

これから本日を契機に、いよいよ自行化他に向かって御精進されることを心からお祈り申し上げ、本日の総会の挨拶といたします。

（平成十三年三月二十五日　法華講連合会第三十八回総会の砌　五七〇号）

地涌の菩薩の使命

今、末法の時、地涌の上首・上行として、また、内証・久遠元初の仏として御本尊を顕され、三大秘法を弘通あそばされた宗祖大聖人の仏法を、寸分の狂いもなく受持し信行する集団は、ただ我が日蓮正宗あるのみであります。

それ故に、まさしく妙法広布の大願をもって進む地涌の菩薩は、我ら日蓮正宗の僧俗、法華講の皆様のほかに、どこにありましょう。どこにもけっしてない、と断言するものであります。

かの池田創価学会の如く、見せかけのみ

で、真の志弱く、種々の障害起こればたちまちに節操を捨てて謗法に与同し、我意強盛にして、弱者には非道の限りを尽くして世間・出世間の秩序を乱す者が、絶対に地涌の眷属（けんぞく）ではありえないのであります。

さてそこで、この本日の出陣式の集まりは、その本質においていかなる意義を持つものでありましょうか。一言もって言うならば、地涌の菩薩の折伏の出陣式であると信ずるものであります。

大聖人様は『諸法実相抄』に、

「末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり。日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へつたふるなり。未来も又しかるべし。是あに地涌の義に非ずや」（御書　六六六ページ）

と仰せられました。この「未来も又しかるべし」とは、まさに今日の出陣式を指し給うと拝信いたします。すなわち、自行化他の題目を唱えて自らも成仏を確信するとともに、他をも導きつつ、三毒強盛にして心の貧困極まる今日の濁悪の世をおのずから救済する功徳を顕すことがそれであります。故に、本日参集の僧俗皆様は老若男女を問わず、妙法を受持して、たとえ一人なりともこの正法を説き勧めんと志すその身に、宛然（えんねん）として地涌の菩薩の深く尊い境界と功徳が具わるのであります。

この地涌の菩薩は、世の腐敗・堕落の泥水に染まらぬこと、蓮華の水に在るが如く、

しかもその汚泥を離れず、大慈悲をもって志念力堅固に妙法を弘通することが経文の相であります。つまり、世間の迷いのなかの悪習・悪風に盲従せず、妙法受持を根本として折伏の信念を持って濁悪の世を進むことこそ、地涌の使命であります。

今、宗門の六百になんとする寺院と、そこに組織された法華講信徒皆様の信心の結集と団結こそ、まさにこの崇高な目的を実践すべき場であることを、深くお考え願いたいのであります。

最後に、もうひとこと申し上げることは、この出陣式が、皆様一人ひとりにとって何を意味するか。すなわち、一人ひとりが、一人も漏れなく地涌の菩薩たる折伏の陣列に並ぶことが、出陣の意義と信ずるのであります。

大聖人様は南条時光殿に対し、

「其の国の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ」（同　一二四二ページ）

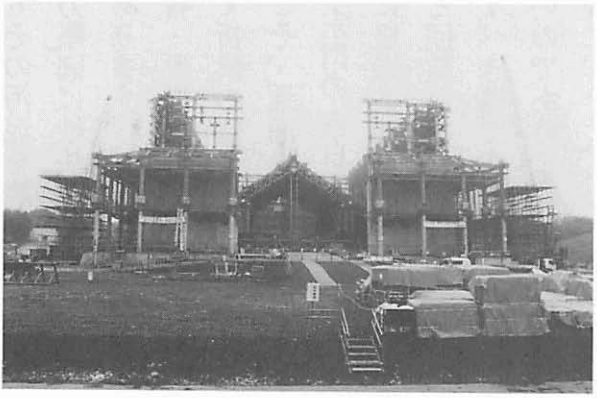
と仰せであります。御本仏より仏法の弘通を任せられる、これほどの光栄がありましょうか。しかし、この出陣式参加の皆様こそ大聖人様より、その生活の場において大法の折伏を任せられたと信ずべきであります。

さあ皆さん、深い信心に住し、異体同心に楽しく高らかに題目を唱え、いかなる難をも忍び、一歩も撓（たゆ）まず、一年に一人が一人の折伏をなさんとの誓願を立て、本日より宗旨建立七百五十年に向かい、正法護持と折伏の歩みをしっかり進めてまいりまし

ょう。

以上、出陣式挨拶といたします。

（平成十一年一月三日　宗旨建立七百五十年出陣式の砌　五一七号）



建設中の奉安堂

奉安堂建立の意義

顧みるに宗門は僧俗の一致団結のもと、平成二年の三万登山の大成功を来たし、その四年後の平成六年の地涌六万大総会の大成功、そして、さらに四年後の本年、新客殿落成慶祝十万総登山を大成功裡に終了いたし、大法弘通の実証を明らかに顕してまいりました。

これより、いよいよまた、四年後の平成十四年、宗旨建立七百五十年に向かい、衆生救済のため、三十万人の参詣を目標に、法華講の皆様の充実の信心による、僧俗和合の広布への大前進を開始すべき時である

と信ずるものであります。

この時に向かって、広布への具体的実証として、僧俗一同の志をもって、このたび拡張した奉安殿より、さらに大いなる堂宇としての奉安堂建設の要望が、もし地涌の菩薩の澎湃（ほうはい）たる出現の如く、下より涌き上がるならば、これこそ、真の信心修行による広布への実相の顕れに当たるものであろうかと存ずる次第であります。

要は、これからの時こそ、真の僧俗和合、異体同心の大信力に住し、破邪顕正の発揚をもって本仏大聖人の御高覧に備え奉り、一人ひとりが自行化他の本門戒の実践をもって、即身成仏の本懐を現当二世に顕してまいろうではありませんか。

以上、この慶祝法要の終了に当たり、一言、現在より未来への方途に関する所懐を発表いたし、結びとする次第であります。

（平成十年四月五日　総本山客殿新築慶祝記念大法要・午後の部の砌　四九九号）

◇　◇　◇

さて、皆様も御承知のように、一昨年より正本堂の解体が始まりまして、昨年の五月乃至、六月においてことごとく解体が終了いたし、きれいな広場に変わりました。そして、いよいよ本年より、奉安堂が建立されるという運びに相なっておるのであります。

この正本堂を解体したということについては、色々と疑問のある方もあるかと思いますが、一昨年の客殿の落慶大法要の最後

の時に、私がほぼ、その理由を申し上げてあります。すなわち、一時、宗門の信徒として正法護持興隆に功績があったかと思われるところの創価学会の在り方のなかで、特に過去から現在において、第三代の会長としておった池田大作という大謗法者の誤った見解が、種々の形ではっきりと現れてきたのであります。そのようなところから、この正本堂の存在が謗法の固まりと言ってもいいような意味に変わってきたのであります。

したがって、清浄なる本門戒壇の大御本尊様御安置の場所としてふさわしくないということを私は確信いたしまして、この客殿落慶の時をもって直ちに御戒壇様を現在の奉安殿にお移し奉りました。そして、そのあと無用の長物となった正本堂については、もはや存在の価値がありませんし、そのまま置いても朽ちるばかりでありますから、思い切ってきちんと取り払ったのであります。そして、新しく御戒壇様を荘厳し奉るところの立派な堂宇を、僧俗一致の広宣流布に向かう信心修行と供養の精神において建立すべきであるということを考えておるのであります。

また、それについて皆さんにお諮り申し上げましたところ、僧侶の方々、信徒の代表の方々の大いなる賛同を得まして、昨年から本年、また来年において、奉安堂の建立の御供養を募り、皆様方の真心の御供養によるところの立派な、清浄な、また、大きな堂宇を造って、未来における広宣流布

の発足の起点として考えていきたいと思うのであります。

池田大作は、正本堂の着工大法要において、『三大秘法抄』の文を引いて、もったいなくも、正本堂が『三大秘法抄』に示されるところの戒壇であるということを、はっきりと申しました。これは大聖人様の広大無辺な日本乃至、世界の一切衆生、人類救済の目標としての広宣流布戒壇建立の意義を、自分の我意、我見、我欲の見解をもって、まことに小さく貶(おとし)めた考え方であります。のみならず、池田大作はさらにその前においても、会長就任ののちでありましたが、「戒壇建立ということは形式の形式であり、従の従の問題である」というような狂った見解を申しました。まさに大聖人様の御一期(いちご)の一切の御化導を括(くく)られた本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇という三大秘法、そのなかでも特に戒壇に対する唯一の正しい御指南をいかに貶め、軽んじていたかということが実に明らかであります。

これらの謗法を一切捨て、振り払って、私どもの建立する奉安堂は、大聖人様の『三大秘法抄』の尊い戒壇建立の御指南、すなわち御本仏の無窮の大慈大悲による広布への実現に向かって、これから一歩一歩、僧俗が共に和合して進んでいく、その護法の志をもって建立するところのものであるということを、ここに申し上げたいのであります。

その意味において、皆様方も一紙半銭でも、この奉安堂の建立ということの意義を

深く弁えられて、無理のない形において、できる限りの御報恩の御供養をされまして、皆様と共に立派な奉安堂を建立していきたいことを心より念願するものであります。

それがまた、一人ひとりの心のなかに巣食う貪欲、瞋恚、愚癡、特に貪りの心をもって、わずかな金銭も、自分のためには使っても仏法のためには惜しむという誤った貪りの心を打ち破りながら、本当に清浄な信心の行業をもって成仏の境界を得ていくところに仏法の修行の非常に大切な所以が、この奉安堂建立に存することを申し上げる次第であります。

（平成十二年一月一日　元旦勤行の砌　五四一号）

◇　◇　◇

その上からも、この正しい仏法の現在の前進において、奉安堂の建立と三十万総登山を目標に準備するところの本年は、その最後の年に当たっておるのであります。

あの池田大作が世間におもねり、会員におもねり、自分自身の名利のために大聖人様の仏法の本義に背いて、正本堂を「『三大秘法抄』『一期弘法抄』の戒壇である」というようなことを申しました。そして、そのことが宗門の大きな反対に遭うや、今度は矛先を少し変えて「『三大秘法抄』『一期弘法抄』の戒壇の建物として正本堂を建てる」というような莫迦げたことを言い出したのであります。

御先師日達上人は、本門戒壇の大御本尊様のおわします所、そのままが事の戒壇で

あるということをあくまで御指南でありまして、正本堂を『三大秘法抄』『一期弘法抄』の建物として建てるなどということはけっして御本意でなかったのであります。しかしながら、あの時、池田大作等が権力をもって恫喝（どうかつ）してまいりまして、あのような「たるべき」云々というようなおかしな文言が付いたのであります。ですから私は、この問題が起こりました時に、直ちにその誤りをきちんと指摘したのであります。

我々が今回、奉安堂を御供養しまいらせ、そして本門戒壇の大御本尊様を御安置し奉ることは、取りも直さず、これから僧俗が真に一つになって日本乃至世界に向かって正法を広宣流布していくところの正法護持の姿であります。言い換えれば、未来に向かって真の広布への功徳を顕していくために、今回、奉安堂の建立に踏みきっておる次第であります。

したがって、このことについて、かの創価学会の如く、「我々が『三大秘法抄』『一期弘法抄』の戒壇として奉安堂を建てる」などというようなナンセンスな、莫迦げたことを今、日蓮正宗においてはけっして考えていないのであります。

ですから、我々は大聖人様の教えを本因妙という意義において、仏法修行の上から広布への功徳を成就していくということを基として、これからも精進していくことが大切と思うのであります。

（平成十三年一月一日　元旦勤行の砌　五六五号）

支部総登山について

次に皆様法華講各支部の一年に一度の総登山に関する適切な配慮も大切と思います。即ち僧俗一致しての信心修行の根幹たる御戒壇様への報恩参詣に於ける総員参加の趣旨をすべての方々に徹底すべきです。そこに皆様方講員相互の異体同心の団結、また活発な交流による信心の啓発と練磨、更に仏法を基軸とする尊い人間関係の構築と拡充がもたらされ、支部全体に活力が漲(みなぎ)ることを確信します。これこそ宗門七百年の正法正義を源とする僧俗一致の、真の広布態勢の確立と前進の為の要点的行事であります。

（平成七年一月一日　新年の辞　四二三号）

◇　◇　◇

この三十万総登山ということは、全国約六百カ寺における信徒の方々の登山ということであります。ところが今日、それとは一往、別個な形において数年前から、毎年、支部総登山という行事を行うようにお願いしてあります。しかし、総本山から遠距離の寺院は近距離の寺院よりも色々な面で制限がありますので、例えば二年に一回、三年に一回、支部総登山を行うということもやむをえないと考えられてきたわけであります。しかし、基本としては各寺院の支部の人々が、強い信心に基づいて毎年、総本

山に参詣をして、異体同心の和を計りつつ信行倍増していくことが大切であるということを申し上げてきたのであります。

それについて一つの例を挙げますと、これを真剣に行っておる寺院の住職、そして法華講の方々は数多いのでありますが、遺憾ながらある支部においては、毎年の支部総登山ということにもかかわらず、その支部総登山を全く行わない、あるいは行っても本当におざなりであって、人数的に支部全体のわずか数パーセントしか参加をしないという支部もあるようであります。

各布教区の支院長の方々が今日、法華講三十万総登山推進委員会の実行委員になっておりますが、そういった寺院が現実に皆さんの管内にあるのであります。支院長としてそのような寺院の実態というものを、この際、はっきりとつかんでいっていただきたいと思うのです。

そして、ただつかんでいくだけではなく、そこには宗務院という大きな立場からの意味もありますけれども、支院長の立場から、信徒の信仰を鼓舞(こぶ)し育成して少しでも多くの人々が支部総登山のために喜んで総本山に参詣できるように、そういう住職に対しての指導を行っていくということも三十万総登山達成への一つの基礎であると思います。

もちろん、折伏弘教ということ、つまり多くの謗法の人々を折伏教化して、日蓮正宗の信徒として教導しつつ信徒の数の増えることも、三十万総登山達成にとって大切

なことではあります。けれども、目下の立場において支部総登山の実践がまことに不充分であるというような形においては、その時になって、いくら「三十万総登山だ。うちの支部は何人登山しよう」ということを言ったとしても、それを達成することはできないと思うのです。今からその達成に向け、一歩一歩、進んでいかなければならないと思うのであります。

それらのことについて支院長の方々が、指導をしておるのだろうけれども、今までかなり無関心であり、御自分の寺院の支部はまだしも、自分の管内の寺院でありながら、そういった寺院について「この寺院の支部の登山状態はどのようになっておるのか」ということをあまり考えなかったり、あるいは指示・教導もしないというようなことでは、非常に不充分ではないかと思うのであります。

このことは信徒の方々についても同様であって、講頭・副講頭以下、支部を結成されておる法華講支部役員の方々が、そのような不充分な姿を平気で見過ごしておるということもありうると思うのです。そういうことにおいては、法華講連合会さらに地方部等の関連のなかにおいて切磋琢磨(せっさたくま)しつつ、お互いに啓発していく意味で、色々な面で信徒から信徒へのお話し合いをされるということも大切と思うのであります。

このような問題もあるということで一つの例を挙げましたが、全体のなかから考えてみますと、いくら僧侶だけが真剣に精進

しても、この三十万総登山は不充分だと思います。要するに信徒の方々、特に幹部の方々と各布教区の支院長を中心とした住職等の方々が、今日からやるべきことを一つひとつきちんと行っていき、またそれを増進せしめていくということを常に考えていくところに、三年後の三十万総登山がはっきりとした具体性をもって実現されてくるということを私は思います。

やるべきことをせず、今の足元をいい加減にしておいて、その時になって三十万総登山をきちんと達成することは、けっしてできないと思っておるのであります。

この三十万総登山については、色々な面において考慮すべきこと、配慮すべきことが、それぞれ僧侶の立場にも信徒の立場においてもあると思いますが、それらをきめ細かに考えつつ、僧侶同士、あるいは信徒同士、さらに僧俗が一つになって一つひとつの問題にしっかり取り組み、問題を確実に消化していくということが大切だと思います。

（平成十一年一月十六日　第一回宗旨建立七百五十年慶祝記念局実行委員会合同会議の砌　五一八号）

信心即生活（一行一切行）

また、先程から、講頭さん、副講頭さんについて色々なお話がありました。皆さん方のなかに、「我々在家には食べていくための仕事があるので、色々と指導してくださるが、それらのことの大半は、御僧侶がやればよいのではないか」というように考える方がいるとは思いませんが、つい在家としての生業のなかでかまけるような意味があると思うのです。

しかし、宗門の在り方は、昔から僧俗一途であります。お経も、お題目も、御祈念も、僧侶は特別なことを何もしておりません。皆さん方より特別な何かがありますか。『勤行要典』に僧侶は別であるなどと書いてはいないはずです。必ず、僧俗はすべて同じであり、一つなのです。

では、在家は何をすべきかというと、やはり唱題を行うということが非常に大事だと思うのであります。このお題目の功徳は、普通の考え方とは全く違う御仏智によるのです。ですから、一生懸命に信心ばかりしていると、世法のほうがおろそかになるというように考えておる人は、はっきり言えば、お題目が足りないのです。

法華経の円理より見た行について「一行一切行」という語がありますが、一つの行がそのまま全部に通じているという意味で

あります。

ですから、真剣にお題目を唱えて講中のことをお考えになる皆様方、講頭・副講頭の命そのままが、現在、あなた方が持っていらっしゃる山のような荷物も、あらゆる職業も、一切に通ずる意味があり、必ず一切を開いていくことができると、私は申し上げるものであります。

僧侶である私に世法のことまで判るはずがないと思う方もあるかも知れませんが、これは確信を持って申し上げたいと思います。

そういう体験のある方もこのなかに大勢いらっしゃるでしょう。「これを一つやればこちらがおろそかになる」とか「時間は限られた二十四時間だから、二十四時間のなかでこちらをやっていると、あちらはできない」という信心は、本当の妙法の信心をしていないし、また、妙法の功徳をはっきり受けきっていない姿なのです。

世間では、色々な事業をしていて失敗する場合があります。失敗のなかには、下の者に安心して任せていたのに裏切られて、気がついたらいつの間にかひっくり返っていたというようなこともあります。それはどこに原因があるのかというと、自分自身にあるのです。自分がその人間を見抜けなかったということ、また、それ以上に、自分自身の命のなかから表れてきておる姿、職業なら職業というものを妙法の心をもって正しく見ていないからなのです。つまり、欲のためとか、その他、なんらかの煩悩に

よって間違った見方をしているからなのです。結局、間違った見方をしていると、せっかくの財産や家族、健康、その他様々なものを、煩悩、宿業、罪障等によってなくしてしまうことにもなるのです。

本当に正しい信心をしっかりしていけば、そのまま皆さん方一人ひとりに、天から与えられておる現在の職業、その他のすべてがそのまま正しく照らされ、おのずから妙法の上の生活、命がはっきりと顕れてくるのであります。それが基本です。ただし、その人その人によって色々な因縁がありますから、幸福の表れ方、不幸の表れ方は様々でみんな違うけれども、妙法によって一切が通じていくのであります。

皆さん方は、大聖人様の御命（ぎょめい）によって講頭・副講頭の尊い職を得られておるのです。とするならば、寝ても覚めても講頭・副講頭の立場から対指導教師、対講中、また、様々な意味で講中の発展、正法護持という姿を思っていくところに、あらゆるものが全部、宛然（えんねん）として具（そな）わってくるのであります。

この信心の功徳が、そのまま職業にも具わってくるのであります。「今まで気がつかなかったけれども、信心の姿から見ると、この職業の、または生業（なりわい）の問題、家庭の問題、人間関係等の在り方について、ここを改めなければならない」ということがおのずと判ってくるのです。むしろ、この信心の基本を忘れているから、職業や生活のほうまでがおかしくなってしまうのです。

そこに気がつかないというところに謗法の姿があるということを互いに感じて、「世法即仏法」というものを正しく実践することが大切です。その実証により、講員の方々やあらゆる人々に向かって、この信心によって一切が完全になっていけるのだという確信を持った指導ができるのであります。また、その上から真の広布が世界に向かって進み、あらゆる人が幸せになっていけるというところに、我々が前進する意義があると思うのであります。

世界広布乃至、日本国家社会の安寧もことごとくが、ここを一番の元として確立していくということを我々はよく考えながら、いよいよ精進をしていきたいと存ずる次第であります。

（平成九年三月二十九日　第四回講頭・副講頭指導会の砌　四七五号）

宗旨建立七百五十年慶祝記念・
法華講三十万総登山推進のポスター

家庭訪問育成

本年の「開拓の年」の実践項目の第一として、「家庭訪問による信心の土台作り」ということが挙げられております。これは、宗門の僧侶ならびに柳沢委員長等の話し合いのなかでも実に重要であるということが述べられておりましたけれども、私も実に同感であります。

自分自身の信心において、我が心を妙法と開く上から、その妙法の信心をもってできる限り多くの人々と接触をしていき、その人の命を開かせていくというところに、妙法の下種ならびに教導の形があると存じます。

そのような信心の組織の上で一番大事な在り方でありますから、ここにお集まりになっておる講頭、副講頭等の幹部の方々は、是非、この「家庭訪問」ということに対する決意を強くお持ちいただきたいと思うのでございます。

講頭さん方にはこのような基本は既に弁えられていることと思いますので、改めて家庭訪問の重要性などを言う必要はないかも知れませんが、講頭の指示に従って色々と活躍されていくところの講中の幹部なり、その他役員の方々にお伝えしていただく意味において申し上げるものであります。

講頭としては、講中をまとめる責任者として、例えば百世帯ぐらいの法華講である

ならば、その家庭がどこにあって、どのような家に住んでおり、どのような職業で、どのような家族構成であり、信心の姿はどのようであるということまで、すべて判っておるようでなければならないと思うのであります。

是非とも講頭さん方におかれては、そのようなところまで講中を把握するという面において、家庭訪問の意義を深くお考えいただければ結構かと存ずる次第であります。

そういう気持ちを持って、ここにお集まりになっておる五百数十人の講頭さん方がしっかりした指導性を発揮していくところに、その講中における信心の充実と発展・融和の道が開かれていくものと思うのであります。

その意味において、講中の実情把握は他の幹部に任せておき、自分はただ報告を聞いておればいいというようなことではなく、講頭は講中の中身の全部を知っていなければならないという自覚と、お互いに励まし合っていこうという温かい心をもって自分の足で実際に歩き、その実情を見ながら、妙法受持の姿を現していくことが大切だと思うのであります。

これは口で言うほど簡単なことではありませんから、「そこまでしていたら、自分の世間の仕事のほうがお留守になってしまわないだろうか」と思われる方もいらっしゃるかも知れません。

しかし、私は、片方のことができない命は、もう片方もまた、完全にできない命で

あると思うのです。御本尊様から命ぜられたことをきちっと行っていく姿があれば、また、これを行っていく間にそういう命になっておれば、世法における御自分の天職、いわゆる生活のための仕事をきちっとこなしていくところの智慧と力も、おのずから湧き上がってくるものなのです。これが妙法の尊い命であると思います。

したがって、信心の活動がしっかりできない人間は、世法の仕事の面でも全うできないし、信心活動がきちんとできる人は、世法においてもまた、それをきちんとこなしていける姿が実相であると、私は思うのです。

（平成八年一月三日　法華講連合会初登山会御目通りの砌　四四七号）

折伏行を実践

その上からも、私が常に申し上げておりますとおり、この正月の初めに当たり、本年中に最低、一人が一人の折伏をし、真の自行化他の御奉公ができうるよう、大御本尊に誓願し、お祈りを申し上げることが大切であると思うのであります。

特に講中の先頭に立ってその信心修行を導くべき講頭・副講頭等の方々にあっては、自らその誓願をしっかり実行するとともに、他の講員の方々にもこの趣旨をよく体さしめ、真の異体同心の団結をもって勇猛精進されることを心よりお祈りする次第

であります。

（平成七年一月三日　法華講連合会初登山会御目通りの砌　四二四号）

◇　◇　◇

真の仏法の興隆と道義社会の建設、そして一人ひとりの正しい仏法による真の幸福の確立こそ、まさにこの時であります。

さあ、皆さん、出陣によって折伏の陣列に並ばれた以上、次は一歩一歩の前進こそ大切であります。その前進の元になるのは、まず我が身、我が信力をもって折伏を行じようとの偉大な目的感を持って御本尊に祈念することであります。そして、世界何十億の民衆に先駆けて、本地甚深の無上の妙法を、我れこそ持てり、との堂々たる確信ある生命の喜びをもって唱題するところ、おのずから不思議な実相による折伏の因縁が湧き上がると信ずるものであります。

大聖人様の大慈悲を拝し、表面一往は幸せそうに見えても必ずあらゆる苦悩が迫り来たる一切衆生に対し、妙法の大果をもって三世の幸福を開かせるのは、正法三大秘法の折伏にのみ存することを念じつつ、一人がまず立ち上がるの決意を持つことであります。そこに三人が立ち、五人が立つでありましょう。

（平成十一年三月二十八日　法華講連合会第三十六回総会の砌　五二二号）

◇　◇　◇

下種本仏大聖人様は、この妙法の根本法

体を命懸けで顕されました。『諸法実相抄』に、

「日蓮をこそにくむ(憎)とも内証にはいかゞ及ばん」(御書　六六五ページ)

との御金言の如く、竜の口の断頭場裡には不思議の光り物出現して、三類の怨敵の憎悪による斬首の計画も不可能となりました。

しかし、大聖人は御自ら日蓮の首は刎(は)ねられて魂魄(こんぱく)佐土の国に至ると仰せであり、この「魂魄」の二字に万年の人類を救う本仏の内証がおわしましたのであります。故に、真実の正法である程、様々の怨嫉(おんしつ)と迫害が来るけれども、真の仏様はこれを打ち破って大正法を確立されます。いわゆる「是好良薬今留在此(ぜこうろうやくこんるざいし)」たる本門三大秘法の妙法蓮華経であります。

故に此の大法弘通には、おどしを以て、正法の弘通を妨げんとする謗法者が種々の形で表れてまいります。今日、我が宗門が正法正義を貫徹せんとするや、創価学会が魔鬼の本性を表し、邪悪の牙をむき出して悪口罵詈(あっくめり)の妨害を企てております。しかし所詮、正理に背いて我利我見を通さん為、没義道に荒れ狂う姿こそ、その本心は弱い臆病者共であります。

今やこの大法弘通における真の時至り、昨年はその年頭より「出陣の年」と銘打って宗旨建立七百五十年に向かい、地涌六万の誓願を実現すべく本宗僧俗が折伏の陣列に並び、勇ましく本格的な前進が開始されました。

そして今年こそ、まさにそれに引き続き、かつ宗旨建立の佳節を二年後に望んで、渾身の力を奮って、唱題と折伏に邁進すべき「実行」の年であります。三十万登山の成否は、本年の僧俗一致の信心と折伏実行にかかっていると申すべきであります。

その上からもこの新年に当たり、信徒皆様一人ひとりが地涌の菩薩たる大自覚を以て、我れ一人立ち上がり、本年に於て必ず一人以上の折伏の縁を作り行ぜんとの誓願を、大御本尊に祈念し奉られることこそ肝要であります。その覚悟を以て行ずる勤行と唱題に於いて、ともすれば六道の迷いの中に沈みがちな不幸を呼ぶ命が、久遠劫来の常住の功徳に満ち溢れる、不思議な尊高の生命に変わることを確信するものであります。この我れ一人が本年一人以上の折伏を行ぜんとの志が、世界広布の要諦であります。

また、その実践に当たっては、それぞれ大切な世務を持つ皆様として、尊い毎日の時間を、強い信念に基づく尊い工夫を以て善処し、生活と仏法の一切に於いて真の充実を図る事が大切と存じます。これは行うと決意すれば必ず出来るのであります。

（平成十二年一月一日　新年の辞　五四〇号）

◇　◇　◇

我々が現在より未来永劫に向かうなかで、色々な宿業による命の展転変化がありますが、そのなかにおいて大切な利益は冥益であります。現在ははっきり判らないけ

れども、その功徳が次第に我々の命のなかを真に浄化して、成仏の境界が自らはっきりと顕れていき、また人をも導いていくという、すばらしい境界を得ていくのは、むしろ冥益であります。

これが先程申し上げました「煩悩・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて」の次の「三観・三諦即一心に顕はる」という御指南に当たるのであります。三観、すなわち空観・仮観・中観の一切に、我々の生活のなかのあらゆる念慮、心掛けのすべてが篭もっております。それらがことごとく浄化された姿をもって顕れ、我々の命のなかに深く浸透していくのが三観即三諦であり、妙法を唱えるところにそれがそのまま、我が一心に顕れてくるのであります。

しかし、このことは我々には判りません。空観もよく判らなければ、仮観も広すぎて判りません。しかし、我々の命のなかにその三観・三諦の功徳が自然に一心に顕れて、それを受けきっていくところに、現在から未来永劫に向かっての成仏のための冥益を、自らの身体のなかにはっきりと頂くことができるのであります。

この心をもって我々がしっかり唱題し、確信をもって喜びの生活をしつつ、人に向かってこの正法の功徳を伝えていく、世の中の悪業や誤った教えに毒されておるあらゆる人々に、この正法を教えていくということが折伏であります。

この一年において一人が一人の折伏を必ず成就していこうということが、本日ここ

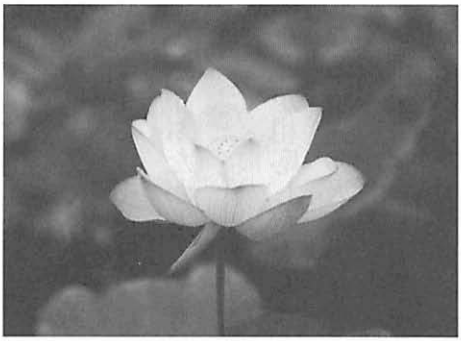
にお集まりになった皆様方、そして日蓮正宗僧俗の本当の宿願であります。そして、人を導くことによって自らが本当に幸せになっていくのであります。

自分一人だけが幸せになっていって、そこでそのままやめてしまっては、人生のなかで一人ひとりが受けておるところの功徳は顕れてまいりません。

この一年に自分の信心において立派な折伏をし、一人の信徒を立派に導かせていただこうという、その願いをもって唱題をするところ、御本尊様は必ずその願いを聞き入れてくださるとともに、皆様方一人ひとりの命のなかの成仏の内容が、深い境界に向かって進まれていかれると確信する次第であります。

本年もその意味において、皆さんの自行化他におけるいよいよの御精進を心からお祈りいたしまして、唱題行の御挨拶とする次第であります。

（平成十二年一月三十一日　唱題行の砌　五四三号）



唱題行

皆さん方のそれぞれの生活は、一人ひとり環境も違えば、目的も違うというふうに、あらゆる立場の方がおられます。しかし、その一人ひとりの方が唱題行によって、本日は雨が降っておりますが、雨が降ることによって三草二木、ことごとくが大きくなっていくように、平等の功徳・利益が与えられるということを信ずるのであります。

「汝今一念随喜の信を致す、函蓋相応・感応道交疑ひ無し」（御書　四〇八ページ）

という御文がございます。函とは「はこ」という字であり、蓋は箱の上にかぶさる「ふた」であります。

例えば、一尺の箱に一丈のふたがあっても何の役にも立ちません。また反対に、大きな箱に対して小さなふたがあっても、なかへ落ちてしまい、ふたの役目をしません。やはり、箱とふたとが相応した大きさが大切のようにいかなる境遇の人、いかなる貧富、賢愚、勝劣、すべての人に平等の利益が存するところが妙法であります。

その次の「感応道交」とは、感は我々の信心であります。応は御本尊様の、輪円具足の尊い功徳聚であります。道交の道は「みち」ということですが、道は我々がお題目を唱えることであります。それによって、御本尊様の一切の功徳が、我々凡夫の迷いの命に通じ、九界の迷いがそのまま仏

界を頂くことができるのであり、すなわち、信心によるところの我々の九界の迷いの命が御本尊様に通じて真の十界互具のところへ感応道交していくということであります。

また、先程の函蓋で言いますと、我々は箱、すなわち、器であります。皆様方、ここに生きとし生ける一人ひとりが、自分の命という器を持っておるわけです。そこには大きな器、小さな器、色々あるわけですけれども、その器が正しい信心によって正しいふたを得て初めて、正しい器とふたになっていくということが存するのであります。

品物の箱は規定の大きさで作ってあり、動きませんから、大きくも小さくもなりませんが、我々衆生は違うのでありまして、現在は小さい器であっても正しい信心によってどんどん成長させることができます。一人ひとりが無限の発展の意義を持ち、無限の尊い功徳により、その生命の器をどこまでも広げていくことができるのであります。

したがって、お題目の功徳が無限であるということがそこに存すると思います。このお題目を知らない人、つまり、正しい三大秘法の御本尊に対する信心と、このお題目の功徳を知らない人は、結局、自分だけの考え方のなかに閉じ込もってしまうことになるのであります。

どんな人も、みんな因縁によって存在しますから、その因縁によって、ある人は謗

法であったり、ある人はそれぞれの社会の重要な役職に在ったり、その他、有意義な人生を送る人もあると思いますが、結局、人間の考え方、凡夫の考え方はそこまでのことなのであります。

それよりも、未来永劫に向かっての無限の意義と、成仏の真の功徳を発揮していくところに、妙法を受持していく我々の函蓋相応の信心の一念が、さらに大きく無限の功徳を持っており、また、無限の発展性を具えておるということを信ずることが大切と思うのでございます。

（平成十年一月四日　唱題行の砌　四九三号）

◇　◇　◇

さらに、ここにいらっしゃる講頭・副講頭の方々に自覚していただきたいことは、皆さんが各講中における本当の中心者であり、責任者であるということです。皆さん方は、今、この時期に、大聖人様から御命令を受けていらっしゃるのです。「各寺院の講頭・副講頭として、あなたが本当にしっかりと信心をして、即身成仏の本懐を成就し、顕していきなさい。そのために、講頭・副講頭としてやるべきことを正法の上から行っていきなさい」ということを大聖人様が御命令されておるのであります。

先程からも立派なお話が色々ございましたが、そこが一番の元でありますから、そこのところを深く考えていただきたいと思います。つまり、講頭・副講頭の方々による真剣な唱題行が、これからの講中の在り

方を決していく一番のつぼであると思うのであります。

このお題目の功徳は、到底、申し上げきることはできませんが、

「我実成仏已来。無量無辺。百千万億。那由他劫」（法華経　四二九ページ）

という寿量品の御文について大聖人様が『御義口伝』で、

「已とは過去なり、来とは未来なり。已来の言の中に現在は有るなり」（御書一七六六ページ）

と仰せであり、また、

「已も来も無量なり、無辺なり。百界千如一念三千と説かれたり」（同ページ）

とお示しになっております。つまり、法界全体のすべての意義が、妙法蓮華経に込もっておるわけであります。すなわち、皆様方が生活においてぶつかっておる、それぞれの悩み、苦しみ、指導等の問題、具体的な形、理論の形の問題のすべてが込もっておるわけであります。

日寛上人の、

「此の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、則ち祈りとして叶わざる無く、罪として滅せざる無く、福として来たらざる無く、理として顕われざる無きなり」（日寛上人御書文段　一八九ページ）

という御指南のなかの四つの成就の姿のなかに、法界全体、我々の命のすべて、生活のすべてが入っております。

ですから、皆様方が色々な問題にぶつかったとき、例えば、「これから講中をどの

ようにしていったらよいか」あるいは「お互いに対立している人達をどのようにしたらよいか」「今、自分は悩み苦しんでいる。人から悪口を言われている。人と対立している。これらのことを講頭の立場として、どのように解決したらよいか」など、ありとあらゆる善いこと、悪いことのすべてを、大聖人様のお心を拝しつつ、大聖人様の御教えに順ずる心をもって、お題目を唱えてごらんなさい。必ず解決するはずです。その解決が、また、尊いのです。その体験、その心を持っておるならば、「私はお題目によって、これだけのことを、このようにして得ることができた」と自信を持って講中の人達に話ができるのです。

そこにおのずと育成という姿も顕れてくるのであります。育成ということは、先程のお話のように、色々な意味で特別な技術も必要だし、様々な配慮も必要でしょうけれども、一切は講頭・副講頭である皆さんの、お題目による本当の確信によるのであります。これが出来上がっていくならば、講中は本当に足腰のしっかりした強い講中に必ず生まれ変わっていきます。

（平成十年五月二日　第五回講頭・副講頭指導会の砌　五〇二号）

◇　◇　◇

宗祖大聖人の御金言に、

「凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり」（御書　一五四四ページ）

と。この志とは三世常住にして吾らの大願

たる妙法値遇を悦び、道念を奮い起こして修行に向かう心地である。また、さらに『聖愚問答抄』に、

「此の妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功徳として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし」（同　四〇八ページ）

と仰せであり、吾らはこの御本仏の金言を信得し奉り、讃仰実践すべきである。

一切を開く鍵は唱題行にある。そこに僧俗一人一人の現在の位置と人格をめぐって、不思議な折伏教化の因縁がおのずと顕れる。また、それが世界広布の要諦でもある。

（平成十一年一月　新年の辞　大日蓮六三五号）

◇　◇　◇

「一年に一人が一人乃至以上の折伏を」という標示は、僧俗の覚悟であり目的観である。この折伏成就のために最も大切なことは唱題行であり、いわゆる崇高な折伏という目的を持った唱題こそ、強い生命の力をもってすべての生活の案件がおのずから開け、調う功徳を生ずるのである。

正しい目的観を持った唱題、これこそ大仏法前進の鍵であり、心の福智二徳、身の荘厳と健康を限りなく顕現する最高・最上の生活法である。

大聖人は御書に、

「此の妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功徳として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし。譬へば網の目無量なれども、一つの大綱を引くに動かざる目

もなく、衣の糸筋巨多なれども、一角を取るに糸筋として来たらざることなきが如し（乃至）汝今一念随喜の信を致す、函蓋相応・感応道交疑ひ無し」（御書四〇八ページ）

と仰せられた。一切を束ねる一こそ、めでたい新年のより良き出発に当たるのであり、すなわち妙法への不退転の信行にほかならない。

これを根幹として、折伏の強い根を自らの生活のなかに張りめぐらし、堂々たる三十万登山態勢の実質的達成とも言うべき本年に、実りある成果を行ぜられることを、ひたすら願う次第である。

（平成十二年一月　新年の辞　大日蓮六四七号）

◇　◇　◇

我が宗門は、今や僧俗の固い一致団結のもと、明後年に迫った宗旨建立七百五十年の佳節に向け、広大なる下種本仏宗祖大聖人に対し奉る仏恩報謝のため、ならびに大正法広宣流布のために堂々の大前進を行いつつあります。

さて、ここで一往、過去を振り返るとき、昭和より平成にかけて、その内面に包んでいた邪義による、池田創価学会の次第に露わになった宗門への誹謗に対し、たび重なる我らの教導も聞く耳を持たず、宗門への蔑視・軽視がいよいよ著しくなりました。そこで、ついに平成二年十二月、法華講の清浄化と刷新のため、法華講本部組織に関

する規則を改正し、具体的には池田大作ほか学会幹部の法華講本部役員としての関与を排除いたしました。

以来、池田大作ほか創価学会の荒れ狂う有り様は、大恩ある宗門への恩義もものかは、付嘱の大事も七百年の仏法正統血脈をも土泥に踏みにじる悪心をもって、ありとあらゆる誹謗・迫害・中傷を行ってきたことは皆様も御承知のとおりであります。これに対し、宗門は、あくまでも宗祖大聖人の正法正義を守りぬき、広布への前進を志してまいりました。

すなわち、法華講の皆様による平成二年の三万名総登山より、四年後の平成六年の六万名総登山、そして不思議な阪神大震災の因縁によるところの客殿新築に伴う平成十年の十万総登山が、ことごとく大成功をもって結ばれたのであります。

思えば、池田大作等の異体異心の仏敵と大きく異なり、真の法華講としての在り方より、また、その全体的活動機構としての法華講連合会が、僧俗一致の麗しい団結のもとにこのように大発展を重ねつつ、宗祖大聖人、歴代上人の御命（ぎょめい）たる正法広布に大前進をなすことは、宗門史上、まさに未曽有のことであると信ずるのであります。

この我らの正法弘通は、止（と）めどなき五濁乱漫の相によって腐敗・堕落した日本社会のあらゆる機構を根本的に浄化するところの、本仏大聖人の大慈大悲を現実に実践し奉る、唯一の大道であると確信いたすものであります。

故にこそ、来たる平成十四年の宗旨建立七百五十年の佳節に対し、我らの大法弘通の精進と、その実証を顕すことがまことに大切であり、本年こそ、その大切な年に当たると思うものであります。

そこで、この総会に臨み、私より皆様に一つの提案がございます。それは、目下の状況上、推測されることは、本年四月二十八日に、かねて建立を発表した奉安堂の着工法要を執り行う運びが予測されます。あるいは期日に少々の前後があるかも知れませんが、この奉安堂の着工法要の日より百日間を限り、皆様一人ひとりが特に一日三千遍、百日間で三十万遍の唱題を行い、もって宗祖大聖人様の、

「今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」（御書　一五九四ページ）

の御金言に広宣流布の功徳と実証を込め、折伏の大増進と成就を期したいと思いますが、皆さん、いかがでありましょうか。

唱題は、本仏大聖人が常にあらゆる御書に御指南の如く、本地甚深の奥蔵にして一念三千の法門を振り濯ぎ立てられた大御本尊への帰命であるとともに、祈りとしてかなわざるなく、罪として滅せざるなく、福として来たらざるなく、理として顕れざるなき、現当二世の功徳を成就する真実行であります。この肝要な時期に、御本仏の忍難弘通の大慈大悲を拝しつつ行ずることこそ、最も宿願成就にかなう所以であると信ずるものであります。

（平成十二年三月二十六日　法華講連合会第三十七回総会の砌　五四六号）

◇　◇　◇

私は本年の四月二十八日、宗旨建立の佳き日から百日間を区切って、一日三千遍の唱題行を提唱したのであります。全国各寺院の僧侶乃至、信徒の方々もこれに唱和して、この百日間、一日三千遍の唱題行を執り行ったことと確信しております。

五月、六月、七月には十期にわたる法華講連合会の夏期講習会があり、また、その他様々な法要・法務もあり、そのために私も非常に忙しい意味がありました。ですから、行ってみて判ったのですけれども、そのようななかで一日三千遍の唱題行を行うということは、たしかに大変なことだったと思っております。そこでやむをえず、どうしても行うことができない日が三、四日あったと思うのであります。しかしそのときも工夫をいたしまして、次の日、あるいはその次の日に、その日の分と併せて五千遍とか六千遍というような形で行える時に消化いたしまして、都合、一日三千遍としての百日間の唱題行を滞りなく終了させていただいた次第であります。

本日はその最後の日に当たっており、ちょうど百日目なのです。そして、百日目の最後の日は三千遍の唱題行を総本山にいる僧侶と寺族だけで行うということを前から言っておりました。ところが、ちょうどそこへ昨日から皆様方が総本山へおいでにな

りまして、ただいまは図らずも皆様と一緒に唱題行を行うことができ、私も本当にうれしく思っておる次第であります。

この唱題行を真剣に行うというところに、過去以来の煩悩あるいは罪障をおのずから浄化して、真の仏道成就の道が現在より未来永劫にわたって開けるのであります。その意味において、皆様には今後とも御精進をお願いしたい次第であります。

そして一往、本日で一日三千遍の唱題行という形は終わりましたが、私はこれからも随時、随所に、五百遍の場合もありましょうし、千遍の場合もあるでしょうが、朝晩の勤行のほかに唱題を重ね、その都度、種々の問題に対して道を正しく開いていくところの意義が唱題行にあることを確信しつつ、さらに精進していきたいと思っておるものであります。

宗門は今、宗旨建立七百五十年、西暦二〇〇二年の四月二十七・八日以降の大法要ならびに三十万総登山に向かって勇躍の精進と前進をしておるところであります。その完遂のためにも、この唱題行を本年度の精進と正しい成果を確立していくために行ったのであります。しかしその目標は平成十四年、西暦二〇〇二年の三十万総登山に存するのであります。

そして四月から始まる三十万総登山は当然、国内の信徒を中心として行われますが、海外の方々は海外部長の意見もありまして、現在、建立の支度を整えておる奉安堂が出来てから、つまり十月の十二日以降に、

立派に出来上がった奉安堂に御安置申し上げる御戒壇様への御報恩のために登山するということを、だいたいのめどとして考えておるのであります。

（中略）

したがって、その意味からも一昨日、この奉安堂の建設許可が下りましたが、その許可が下りたところへ皆様方がはるばるおいでになったということは、正法興隆の上から本当に喜ぶべきことであると思うのであります。

ともかく、世の中のありとあらゆるもののなかにおいて偽物が非常に横行しております。仏法の上からこれを見るならば、釈尊が方便として立てたところの宗派が、日本において奈良時代には南都六宗と言いますが、倶舎宗、成実宗、律宗、法相宗、三論宗、華厳宗という六つの宗派がありました。これは今ではなくなっておるものもあるし、法相、三論等のように今でも曲がりなりに存続しておる宗派もあります。その後において天台宗、真言宗が現れ、さらに鎌倉期に至って禅宗、浄土宗という宗旨が出ました。このなかで特に禅宗、浄土宗等は釈尊の本懐たるところの教えを全く無視し、いい加減な間違った形から釈尊の方便の教えを持ってきて、それを敢えて末法の下根下機に対する一時の弥縫策のような形で示したところの教えであります。したがって、これは仏法の上からするならば全部、本物ではない、つまり偽物であります。

真実の教えという意味においては、我々

の命の真実を本当に正しく悟り、開かれて、久遠以来、我々を導かれておるところの法華経本門寿量品の仏様と、一人ひとりの命のなかに存在しておるところの心の意義において、これがことごとく一念三千という珠(たま)を含んでおるということが本物なのです。そこに初めてすべての人が未来永劫に向かうところの真実の道筋が存在するのであります。

現在、釈尊仏教においても、その他、世の中のあらゆる道理にかなわないところの独断の宗教というものがたくさんあります。そういうものはすべて衆生を導くところの本物の教えではないのです。そのけじめをきちんとつけていくところに我が日蓮正宗の布教の姿が存するのであります。だから「あなたの信ずる教えは間違っていて、本当の幸せにはなれません。偽物です」ということを他の人に向かって確信を持って説いていくことが日蓮正宗の正しい筋道を顕していく布教の姿なのです。

世の中には道にたがうところの、あるいは偽物のような形のものもたくさん存在しております。そのうちの最たるものが日蓮正宗の信徒から現れましたが、それは今日、日蓮正宗の戒壇の大御本尊様に、そして下種の三宝に背いておるところの池田創価学会であります。これはその拝んでおるところの対象も、その存在自体もすべてが偽りであり、偽物であるというけじめをはっきりつけていくことが、正しい筋道が顕れてくる所以(ゆえん)だと確信するものであります。

皆様方におかれましても、それぞれの国において、創価学会のいる所もあるかも知れませんが、それはすべて偽物であって本物ではないのです。したがって絶対に幸せは掴めないのです。本当の幸せを掴むものは何かといえば、もちろん宗祖大聖人様が、

「南無妙法蓮華経ととなうべし」（御書八三七ページ）

と仰せになった本門の題目でありますが、この本門の題目は、正しい本門の本尊を信じて唱えるところに真の筋道と道理、功徳が存するのであります。

皆様方は既にその正法を正しく信解されておることと思いますが、宗旨建立七百五十年に向かって我々宗門の僧俗が正しい教えを一人でも多くの人々に理解させて、この世の中に本当の正しい筋道と功徳が堂々と大きく顕れてくるところを目標とし、宗祖大聖人様の一閻浮提正法広宣流布の御教えとお言葉を確信いたしまして、いよいよ精進していくことが肝要であると存ずる次第であります。

（平成十二年八月五日　第七回海外信徒夏期研修会御目通りの砌　五五六号）

誓願達成への祈り

そのなかで、特に大聖人様が「異体同心」ということを仰せであります。すなわち、身体は異なっておっても、心は一つであるということであります。

ところが宗門の僧侶は、まだ完全には一つの心になっていないのではないでしょうか。私はそういう形があるのではないかと思うのです。

その心が一つになるための形を一言、述べましょう。是非これを行ってもらいたいと思います。もっとも、このことは既に行っている人が多いとも思います。「そんなことなら私は言われなくても」という人もかなり多いと思いますが、敢えて申し上げますと、それは朝晩、特に朝の勤行の広宣流布の御祈念の時に「来たるべき宗旨建立七百五十年に当たり、三十万総登山を名実ともに必ず成就なさしめ給え」という御祈念を、本当に気持ちの底から真剣に願っていってもらいたいということであります。

この御祈念を行っている人は多いと思います。しかし、ここにお集まりになっている一人ひとりの方が、その御祈念を必ず真剣にするところに、おのずと心が統一されてくるのであります。すなわち、異体同心の本当の元がそこから顕れてくると思うのです。

今まで漠然とした広布に関する御祈念を

していたかも知れないけれども、具体的に「来たるべき宗旨建立七百五十年に当たり、三十万総登山を名実ともに必ず成就なさしめ給え」という御祈念こそ、大切だと思います。「あとはだれかがやっていくのだろうから、そのうちにだんだんと態勢が整っていくだろう。できなければできないでしょうがないのだ」などという、その程度の意識ではあまりにも時の自覚がないと思います。

しかしそうではなく、「自分がやるのだ」という心をもって、自分のこととしてこのことを真剣に御本尊様に御祈念していただきたいのです。そうすることにより、本当の意味の異体同心として、はっきりと根本的な統一の姿が出てくると思うのであります。

（平成十年八月二十七日　全国教師指導会の砌　五一二号）

講頭の責務

さて、皆様方一人ひとりの信心修行の道においても、また、正法を護持興隆していくための組織の面においても、「これからどのようにしていけばよいのか」という問題に直面しておる方も多いのではないかと思います。

この問題を解決していくためには、先程から色々なお話がありましたけれども、やはり講頭・副講頭等の方々が大聖人様を真剣に拝し奉り、ひたすら唱題を重ねる以外にはないと思います。すなわち、分々に応じて御書を真剣に拝し、信行学の上に唱題を重ねていくところに、必ず、自分は現在、何をいかにしたらよいかという道が開かれると思うのであります。これは先般、宗務院がある一部の僧侶を集めて指導会を開きましたが、その時にも申したことであります。

我々は、いかなる困難、障害でも必ず開けるところの妙法を戴いているのであります。故に、その御本尊の尊い功徳を、他の人から教えられるのでなく、自分自らの信心修行、すなわち、真剣なる唱題によって必ずその道を開いていくという気持ちをもって御精進されることが大切であります。

これは聞いた話ですが、ある法華講の講中において、ある時に千世帯になったけれども、その千世帯が、三年経(た)っても千世帯、

五年経っても千世帯であったというのです。しかし、折伏は少しずつ進んでおり、ある程度は講員も増えておりながら、どうも講中の中身が発展しないということで、このことを不思議に思っている、ある幹部がいたそうであります。皆さんはそれを聞いて、どう思いますか。

これはすなわち、御本尊の功徳を正しく講中に留め、正しく顕していくところの工夫が足りないと思うのです。言うなれば、広宣流布に向かって今現在できることを、具体的、実際的に表していこうとする考え方が、僧侶にも足りないし、信徒にも足りないということであります。

もっとも、信徒は僧侶によって色々と指導されるのですから、まず僧侶がいけないと言えましょう。例えば、僧侶の心構えとして、寺院の建立を考えていくことが大事です。広宣流布のためにはまだまだお寺が足りないわけですから、その建立を志していく。そのように志してお寺を建てていくところに、いよいよ広布に向かっての功徳が増加し、正しい道が開かれていくのであります。

我々は凡夫ですから目の前のことしか見ることができませんが、ただ単に折伏を強調し、成果の数だけを競うようではいけないと思います。そうではなく、むしろ広布を視野に入れた高い視点に立ち、「一閻浮提広宣流布」という大聖人様の御命達成に向けて、我々が実際に行っていこうという気持ちが大切かと思うのであります。

本日の会合は、御信徒の方々に対して指導することがその趣旨でありますけれども、ここに全国の宗務支院長・副支院長という、宗門の重要な役職の方々も参会しておりますので、このようなお話となりました。それはともかく、これからは僧侶だけでなく信徒も、また、信徒だけでなく僧侶もそこに加わり、僧俗が一致和合して前進することが大切であります。そして、共どもに妙法を唱え、また、現実の諸問題に対してしっかりとした処理をしながら、功徳を増加して進んでいくことが大切であるということを申し上げまして、本日の御挨拶とする次第であります。

（平成七年三月二十五日　第二回講頭・副講頭指導会の砌　四三〇号）

◇　◇　◇

まず第一に申し上げたいことは、皆様方の講中役職としての講頭等のお立場は、形式的には宗務院から辞令が出ておりますが、これはけっして、ただ単に宗務院からという意味ではなく、かたじけなくも御本仏宗祖大聖人様が皆様方一人ひとりに対して直接、重任、大役を仰せつけられておるのであるという気持ちを、しっかりとお持ちいただきたいということであります。

私も、常に丑寅勤行において、御本尊様を、そして向かって左におわします宗祖大聖人様の御影（みえい）様を近々に拝し奉る時に、私の一言一動を大聖人様が大慈悲のもとに、また厳しく御覧あそばされておることを、

ひしひしと感じておるのであります。しかし、これは私のみではなく、尊い日蓮正宗の法華講の講頭等の重大な役職にある皆様方一人ひとりを、大聖人様は常に御覧あそばされておるのだと、是非、確信していただきたい。その上に大聖人様のお心を深く拝し奉るときに、泰然たる信心の気迫が大聖人様より与えられ、心身にみなぎってくることを、私も感じておるのであります。どうぞ、その意味において、この新年に当たり、大聖人様の真の仏子としての自覚をさらにお持ちいただくことを念願する次第であります。

第二番目に、皆様方、講の代表者が、僧俗一致の模範としてのお姿を講中の方々に示していっていただきたいと思います。僧俗一致ということが、これからの広布の組織の上からも、精神の上からも、最も大事なことであると思います。

たしかに僧侶のなかにも色々と癖(くせ)のある者もおりましょう。しかし、それは今、我が宗門僧侶が一丸となって大きな目標のもとに前進をしておるなかにおいて、お互いが切磋琢磨(せっさたくま)し、その正法の功徳をしっかりと受けて、転迷開悟、僧道を本当に正しく進めていく努力をいたしております。色々な面で僧侶を常に総本山に呼んで、お互いの話し合いも含めて、僧侶の真の自覚をお互いが持つように努めておるのであります。

そのことは御承知かと思いますが、特に僧と俗が本当に理解し合うという点におい

て、皆様方講頭等のお立場においては、仮りにいかなる状況がありましょうとも、その所属する寺院の住職、すなわち指導教師との間において、妙法の上の真の異体同心の気持ちをもって、講中を立派に仕立て上げていくところの基本となる僧俗一致の在り方を実現していっていただきたいと念じておる次第であります。

三番目には、それぞれの講中において、本年度の目標をはっきりと立てていただきたいと思います。

これには指導教師との話し合いが重大な内容を持ってまいりましょう。講頭さんが一人で考えて一人でやっても、そこに独走という形が出て、僧俗の上からはしっくりしない形が表れてくると思います。やはり、よく話し合った上で、それぞれの講中が、大は大なりに、中は中なりに、小は小なりにしっかりした目標をはっきり立てて、その誓願貫徹に向かって進むことが非常に大事だと思うのであります。これはそれぞれの講中の実状において深く考えて、一歩二歩の前進をすべきであると存ずる次第であります。

第四番目には、先程も唱題行のあとにひとこと申し上げましたけれども、本年、これを本当にしっかりとやり抜いていくための、唱題行の充実ということであります。

昨年度も正月の一日から一カ月間、仮客殿において唱題行を自ら発起して執り行いました。これは、全国の寺院・教会等の僧侶乃至信徒の方々に、唱題行の重要さを認

識し、実践のもととしていただきたかったからでありますが、本日申し上げましたなかの第一点、第二点がそれであります。

しかしながら、私自身、昨年の唱題行については色々と考えるところもあり、その意味から振り返って、充実への糸口としての唱題行から一年間へ開くという意味において、いまだ充分でなかったという反省をいたしております。私は自分の誓願において、今年は年間百万遍以上の唱題を自分自ら行って、この功徳を皆様方、多くの方々に回向しつつ、真の正法護持興隆に励む所存であります。

皆様方はそれぞれのお立場もあり、あるいは職業の忙しさもありましょうから、けっして千篇一律（せんぺんいちりつ）な形で行う必要はございません。しかし、仮りに重大事にぶつかったときも、そうでないときも、あるいは講中の発展のため、あるいは折伏、再折伏のため、その他あらゆる面においての対処のため、功徳の増進のため、朝夕の勤行以外にも、是非、唱題行を行っていただきたいと思うのであります。

一日にあるいは十分、あるいは三十分、あるいはまた一時間と、できる範囲でよいのでありますが、その唱題行を自ら講頭の立場において実践していただくことが、本当に大切な所以（ゆえん）であると思うのであります。それがまた、先程申した第三番目の目標を本当に貫徹しきっていくところの意味で、そのもととなる功徳の確立、増進につながるということを、さらに申し上げる次

第であります。

第五番目に申し上げておきたいのは、講頭さん自らの信心において、仏法即世法、信心即生活の意味をはっきりと割り切っておられないと、講中に対する確信のある指導ができないということであります。

これはおそらく皆様方には釈迦に説法であると思いますが、世法と仏法のそれぞれを、一たす一は二というような算術上、常識上のことのように考えるのではなく、不思議の妙法の上から、一がそのまま一切に具わり、一切がそのまま一において顕れてくるという功徳の姿としてとらえるということであります。したがって、仏法の精進が必ず、そのまま世法の増進に向かってはっきりと顕れてくるということであります。

これは、皆様方もそれぞれ尊い体験をお持ちであると思いますが、今年度はこれをさらに徹底していっていただきたいと思います。

また、それについてまだ不透明な方は、さらに真剣な唱題と仏法の精進をもって、これによってどのような世法の問題も解決し増進されていくものであるという尊い実践体験をつかんでいただき、その上から講中の方々にしっかりと指導していただきたいと思います。そのことによって、あらゆる職業の方々もすべてが妙法を根本とし、それがことごとくに普遍されていくということを感ずるのであります。

（平成九年一月三日　法華講連合会初登山会各講

中代表御目通りの砌　四七〇号）

◇　◇　◇

特に今年は「出陣の年」と銘打って、平成十四年の宗旨建立七百五十年に向かって一体となって前進をする時となっております。どうぞ皆様方が色々な面における、集まりのなかの中心者であるという自覚を強くお持ちいただいて、これから折伏教化、そして三十万総登山の結集に向かい、一段と高い所からの御協力を願いたいのであります。

一人ひとりが折伏をし、自行化他の行業において罪障消滅し、また正法の功徳を顕し、成仏の本懐を遂げていくことが肝要でありますが、やはりなんといっても、それは一人ひとりがただ一人でできることではなく、大きな場のなかにおいて、色々な因縁関係により育成されていくものと思うのであります。そういう意味においては、それぞれの寺院の法華講支部という立場が実に貴重なものであるということを考えたときに、その中心となって前進をされる講頭・副講頭等の各位が、講中のすべてを見渡しながら異体同心の団結を図り、自行化他に邁進をするための激励等をもって、麗しい、また、しっかりと前進をしていくところの支部の空気を作り上げていくということが大切であると思います。

（平成十一年一月三日　法華講連合会初登山会各講中代表御目通りの砌　五一七号）

◇　◇　◇

その上から講頭・副講頭の皆様が、今日、現在のところから、まず一歩を踏み出していただきたいと思うのであります。

たしかに、色々な面で講頭・副講頭の役割を考えるときに、様々な心構え、あるいは早瀬庶務部長から縷々指導がありましたような意義があると思います。たいへん大切なことであります。

しかしまた、一歩下がって考えますときに、皆さん方のなかに「自分はそのようなたくさんのことをやっていくことは、到底、できない」と思う方がいらっしゃるかも知れません。しかし、信心の上から唱題をして現在の段階における講中の姿をはっきりと御覧になり、そこのところから大聖人様の「善に付け悪につけ法華経をすつるは地獄の業なるべし」という御指南を根本として、自分はどのように一歩を進み出すべきであるか、ということをお考えいただきたいのであります。

多くは求めません。正しく法華経の信行に基づいて、一歩一歩、進んでいくということであります。それでよいではありませんか。

その上で、講頭・副講頭の方々は、本年度の折伏目標、また、講中として課せられた在り方を常に肚に入れて進んでいくためにはどうしたらよいか、ということを忘れてはなりません。その根本は唱題行だと思います。

自分では判らないものですが、人間は善いところも具えておれば、悪いところも具えておるものです。すぐに怨嫉が出たり、あるいは下から来るものを蹴落(けお)としたり、上の者を引きずり下ろしたり、色々な意味で人間の悪い面が、信心のなかにおいても罪障・罪業として出てまいります。特に先程の藤本総監の話のなかに、池田大作は大増上慢によって宗門を蔑視・軽視したというお話がありましたが、たしかにそのとおりであります。

しかし、私は、もう一つそこに、あの池田大作は経文にあるところの「猶多(ゆた)怨嫉」の怨嫉であるということを付け加えておくものであります。いわゆる妬(ねた)みなのです。宗門七百年の正しい仏法の伝承に対する立場に自分が立てないことに対する妬みであり、そこから池田の増上慢が起こってきておるのであります。これは非常に恐ろしいことでありますが、それを池田は法華講総講頭の立場において行いましたので、非常に大きな害毒を宗門にもたらしたのであります。

しかし、私ども一人ひとりの心のなかにも、色々な面における小さな心、暗黒な心、怨嫉の心等が存在するのであります。ですから、自分の悪いところを唱題によって開いていくことが大切なのであります。そうすると、そこから開かれた人格が顕れて、周りの多くの人々を勇気づけ、あるいは指導し、あるいはお互いに団結し合い、正法護持興隆、講中の発展に向かって進んでい

くところの姿が顕れると思うのであります。

本日ここにお集まりになった皆さん方一人ひとりの信心を、御本仏大聖人様が御照覧あそばされておるということを確信していただきたいのであります。

その上から、大聖人様の御照覧に応え奉るところの自分になっていこう、その意味でしっかり唱題をしつつ、自分を磨き、講中の隆昌発展に資すために自分が今の立場にならせていただいておるという自覚のもとに、これからもしっかり指導教師を助けて、信心倍増に御精進を願いたいのであります。

（平成十二年三月二十五日　第六回講頭・副講頭指導会の砌　五四六号）

下種仏法（本門の下種折伏）

我々日蓮正宗の僧俗は、大聖人様の御本懐たる本門戒壇の大御本尊様への真の御報恩として、「三十万総登山」という大きな目標を立てて、ここに今日、立ち上がっておるのであります。

そのためには、先程からの話にもありましたように、折伏、再折伏をしっかりと推進していかなければなりません。それはすなわち、大聖人様の御指南たる「一閻浮提広宣流布」の大命令であり、また、法義の上からするならば、本門の下種折伏という

ことに当たると存じます。

この下種ということについて少々申し上げますと、信の一念が根本となり、しかも大聖人、日興上人以来の正しい仏法の護持相伝によって示されてくるところの本門三大秘法の本義において、初めて下種という仏法の在り方が存するのであります。そして、我々がその下種の一念をもって妙法を唱えるところに、過去遠々劫以来の謗法罪障が消滅し、また、現在漫々の謗法の因縁を持っておる我々の心中および肉体の奥深くに、大聖人様の大法の大利益をもって即身成仏の妙法の種が直ちに植えられ、その大利益を受けるわけであります。

しかるに、その元は、大聖人から日興上人へ、日興上人から日目上人へと、大聖人様の御書四百余篇の本義の一切を擣篩（とうし）和合し、下種の本法として伝えられたことに存するのであります。

身延日蓮宗等においては、その下種の本法のなんたるかが全く解っておりません。例えば『観心本尊抄』に五重三段の法門が示されますが、その一番最後の文底下種三段中の流通分（るつうぶん）のなかに、

「彼は脱、此は種（しゅ）なり。彼は一品二半、此は但題目の五字なり」（御書　六五六ページ）

という御指南がありますが、この「彼は脱、此は種」ということは、釈尊の化導における法華経の一切は、迹本二門共に脱益の法華経であり、末法に出現する上行菩薩の御内証、久遠の本仏としての宗祖日蓮大聖人様の妙法蓮華経は、久遠元初下種の仏法で

あることを示される御文なのであります。すなわち、本因妙の下種即脱という、即身成仏の本義を得るところの大法であります。

そのところを彼等は、「これは機に約して考えるべきである」と主張します。すなわち、釈尊の脱の法華経がそのまま、末法へ来れば下種の法となるということで、釈尊在世の機においては脱益であり、末法の機については下種であるとするのです。つまり、釈尊在世の法華経と一番根本をなす結要付嘱の本法を、法体の種脱の相異という本義をもって解釈しないで、在世は脱益の機、末法は下種の機と、機根の上から一部八巻と妙法蓮華経をさばいておるのであります。

この論旨を極言するならば、あの法然、親鸞等の謗法の者達の主張と全く変わるところがありません。つまり、念仏門では「法華経は理深解微であり、千中無一であるから、法華経などは捨てて、ひたすら南無阿弥陀仏を唱えるべきである」と教えますが、これは、法華経を聖道門として高く推しながらも、教えの内容が高尚に過ぎるため、末法の愚劣の機にはふさわしくないとして捨てているわけです。念仏門ではそのように、機に約して仏法の一切をさばいているのですが、日蓮宗もまた、一番大切な種脱相対について、機を中心として法華経を判じますから、念仏門の誤りと全く同じ誤りを犯していると言えるわけです。

そういう誤った法門のさばきの上から宗

旨を立てますから、法華経を信心し、法華経を教えておるようであって、三大秘法中の本尊が雑乱しているから唱題の功徳が明らかでなく、したがって、その成仏の本義がはっきりせず、それらの教えの流伝の姿がすべて、ぼけてくるのであります。したがって、宗旨建立七百五十年の慶讃といっても、せいぜい七十億円ほどのお金を集めて、それで記念事業を行うことぐらいしかできないのだろうと思います。

ところが、我々は、一人ひとりが本当に大聖人様の大慈大悲を拝し奉り、僧も俗も共に一つの行業として、自ら正法を命懸けで受持し即身成仏の本懐を得るとともに、これを他に向かって説き示し、多くの人に対して功徳の種を蒔いていくわけです。この下種の仏法を実践していくところが、宗旨建立七百五十年に向かっての、いわゆる三十万総登山に向かっての我々の行業であります。ここに、下種本仏日蓮大聖人の仏法を正しく伝える日蓮正宗と、外には日蓮宗と名乗りながらも、実体としては全く釈尊の仏法に囚われている教えとの大きな違いがあるのであります。

この下種の大法を信じ、例えばこれから折伏に出掛ける時その他、折に触れて、唱題をたとえ五分でも十分でも真剣に行っていくところに、実に尊い妙法の功徳が皆さん方の生活の上にも燦然と顕れることと存じます。それらの体験が元となり、そしてまた、先程、三師の方が言われたことを実践して立派な講中に仕立て上げ、そこに入

ってくる方をして「本当にこの日蓮正宗の信仰に入ってよかった」「この講中に入ってよかった」と思わしめるような講中の空気を、皆さん方講頭・副講頭の信心によって作り上げていただきたいと思います。

そこに、一人から一人へ、たとえ今現在は大きくなくとも、一歩一歩の前進が必ず将来、講中を立派なものにしていくのであります。そして、そのことにより世界の人を救う姿が必ず顕れてくるということ、いわゆる広宣流布による仏国土の現出という大聖人の御指南を、お互いに深く拝そうではありませんか。

さて、既に創価学会の悪業の姿は色々なところに現れております。今ここでは一々申し上げませんけれども、既に皆さん方も御承知と思います。これはすべて、その元が誤っておるからです。

創価学会は、ただいまの下種のことについても、「創価学会によってこそ、折伏ができたのだ、広宣流布が進んだのだ」と放言しています。たしかに終戦後の形、あるいは昭和七、八年から十年以降の形のなかでは、創価学会の牧口初代会長、戸田二代会長の指導により大きく広布が前進したことは事実であります。しかし、その根本は、下種の本法が七百年、この富士の麓（ふもと）に厳然として相伝されてきたからであります。

これを忘れておるのです。これを忘れて、あたかも自分達が大聖人様の仏法を作り上げ、それを広宣流布したかのような錯覚に陥っておるのであります。

その創価学会は、なかんずく、その首魁である池田大作は、仏法の基本を全く知らないにもかかわらず、仏教用語についても好き勝手に解釈する癖を持っておりまして、例えば発心下種と聞法下種ということについても、まことにわがまま勝手な解釈をしております。

この二つの用語について簡単に申しますと、皆さんが折伏をし、そして御授戒を受けて信心に入る場合、末法においては全部、聞法下種であります。しかるに、そのなかにおいて、信心が薄く、池田大作とか、その指導を受けた連中のように、正法の修行から退転して長い間、地獄に堕ちる者が出てきます。それらの者が、数百万劫、数千万劫という長い間、地獄に堕ちたあと、今日、彼等が口をたくましくして誹謗しておるところの我々や皆さん方の正法護持の功徳により、彼等は再度、発心下種を受けて救われていくのであります。それを発心下種と言うのです。ですから、末法はあくまで聞法下種であります。

ところが、彼等の言い分によると、折伏をした時が聞法下種であり、いよいよ入信を決意して御本尊の下付を受ける時が発心下種だというように教えているらしいのですが、それは全く素人法門であって、そのような立て分けは、ありはしません。末法は一切、聞法下種であります。

このようなことは一つの例ですが、池田大作以下、幹部も含めて、会員のすべてがそのように本義を失って考えておるような

形があります。

それに対し、我々は、「袖すり合うも多生の縁」と言いますが、縁のある人々に確信を持って下種仏法の大功徳を語っていかなければなりません。皆さん方の生活のなかのあらゆる縁において会う方々がそのまま、仏法の因縁の上から折伏をすべき人々であります。しかも、そのうちの特に縁の深い人々に対しての慈悲の折伏、すなわち、大聖人様の大慈大悲の一分を頂戴しての折伏をしっかり実行していくという強い心をもって、これからいよいよ御精進されることをお祈り申し上げまして、私の挨拶とする次第であります。

（平成八年三月三十日　第三回講頭・副講頭指導会の砌　四五二号）

真の僧俗和合（布の縦糸と横糸）

これからの宗門のことを考えますときに一番大事なことは、各寺院における皆様方指導教師の役割、そして法華講の存在だと思うのであります。

昨年度、宗務院において、特に庶務部において色々と考え、それを実行に移して、信徒組織の一元化が図られつつあることは、現状に即する大きな進歩だと思われます。

また、御存じの方もあると思いますが、昨年の末において地方末寺、五百数十カ寺

の寺院のほとんどに法華講支部が結成され、未結成の寺院は、あと二カ寺を残すのみになりました。この二カ寺も、おそらく本年中には支部結成の運びになると思います。

この姿を見ても、これから僧俗が真に和合して広布に向かう宗門の態勢が整ってきたということを感ずるのであります。

このような時機を深く鑑み、これから発展していくためには、まず、なんといっても指導教師であり、寺院住職である皆さん方の御法に対する熱情が大切であります。是非、広布に向かって日々夜々、立派に精進し、法華講を仕立て上げていっていただきたいと思うのであります。

そのことは一人残らずの方が常に考えているとは思います。しかし、色々な面から考えるときには、そこにまだ、決意と工夫と努力が足りない面もあるかと思います。

今日、立派な法華講を育て上げた方は皆、様々な問題に逢着しながらも、護法の決意によってそれを乗り越えてきているのです。是非、そのような経験を持った住職の方々の意見を聞き、色々な面で見習っていただきたいと思うのであります。要は、工夫と努力であります。

日応上人様が総本山を退院され、隠居の立場で布教を志されて、東京・深川の東元町の長屋に居を構えられたという話を、皆さんも聞かれておると思います。その時に詠まれた、

「深川に　蛸一匹の　浮き沈み」

という有名な川柳（せんりゅう）がありますが、本当に苦労されながら、二人、三人、五人の信徒から始められ、今日、法道院という宗門随一の法華講支部が出来上がっているのであります。

（中略）

もう一つ、この機会に申し上げておきたいのは、法華講連合会の存在であります。

以前にも申しましたが、縦糸と横糸があって初めて織物が出来るように、広布の発展、信徒の育成においてもこれは不可欠であります。もちろん、宗務院から宗務支院、宗務支院長から管内寺院の住職というような指導・連絡等があり、それぞれの住職・指導教師から信徒に対して指導を行うという在り方が本来の姿であります。

この縦の形に対して、信徒の在り方という面における横の連絡機関も必要であり、場合によっては、ある意味における指導的なこともやむをえないと思うのです。当然、僧侶の指導が主体であるけれども、信徒同士のなかで、経験の上から、自分の得た信心の功徳の上から、先達がこれを導いていくということがあっても、私はいいと思うのです。

もし、「信徒同士の集まりはよろしくない。あくまで僧侶が指導していくんだ」という形だけに執（とら）われて、「連合会はあっても、なくてもいいようなものだ」というような考えを持っている方があるとするならば、これから宗門の健全かつ円満な発展を期するために、そのような考えは改めてい

ただきたいと思うのであります。

考えてみますと、今日まで、連合会の存在が色々なところで大きく宗門を支え、信徒の融和と、また、広布への前進を推進してきておることを感じております。

この横糸としての連合会の在り方、そして、縦糸としての宗務院、宗務支院、各末寺の指導教師の立場というところが相まって初めて、真に僧俗和合一致しての広布の進展も存すると思うのであります。

（平成八年一月六日　末寺住職・寺族初登山の砌　四四八号）

◇　◇　◇

顧みますれば、私の総本山晋山が昭和五十四年の八月でございましたが、その時以来十六年余、その間、法華講連合会の宗門の法華講の団結、乃至興隆発展に資したところの役割は、まことに大きなものがあったと思うのであります。三万総登山、あるいは平成六年の六万総登山もことごとく目的のとおりに成就し、大きな功徳と確信を皆様がお持ちになり、さらに未来に向かっての広布を拓いていく姿勢の基本が、それぞれのなかにきちんと出来上がってきたと思うのであります。

これも、下種三宝尊の広大なる御恩徳によるものであることはもちろんでありますが、やはり宗門の僧侶、特にそれぞれの指導教師が、広宣流布という大聖人様の尊い御遺命を身に体して、日夜に研鑽し、また、信徒の方々を励まし、教導してきた徳によ

るものであり、さらに、それぞれの法華講の講中が真剣に行学に励むことによって、正法の護持興隆の実が挙がってきたものと思うのであります。

しかし、その信徒の在り方としては、日本全国におよそ六百もの寺院、さらに今日においては世界にまでわたっておりますので、種々の連絡や時々に応じての信徒の異体同心の団結の上からの適切な助言、指示等も必要でありまして、柳沢委員長を中心とする全国の法華講の地方部長の方々、その他役員の方々の努力によって、この隆々たる今日の法華講の姿が存するものと感ずるのであります。

特に、宗門は平成十四年の宗旨建立七百五十年に向かって、かつてない僧俗一致和合による広布への前進を企図し、また、現実にそれに向かって尊い実践の行を始めておるところであります。

ここで考えなければならないことは、やはり僧俗の真の異体同心の和合であると、私は存ずるのであります。

私がいつも申しておりますように、現在の宗門の在り方は、私が直接、統率をする上から、総監以下、宗務院各部にそれぞれの部長等がおり、さらに全国にそれぞれの大布教区長、乃至それぞれの支院長がおりまして、さらにその所轄の各寺院が存するわけであります。言うなれば、そういう僧侶の機構における、縦の線の形の指導系統が基本になっておるのであります。

そこには当然、それぞれの寺院に信徒が

おられ、その信徒の方々の横の連絡、その時々の状況に基づく広布達成のための色々な連絡、指示等の必要性から、この連合会があるのであります。

それは、あたかも縦の糸に対して横の糸がきちんと備わって一つの立派な布を作ることができるように、また、唇歯輔車（しんしほしゃ）という語（ことば）もありますように、同じ目的のために互いに助け合って一つになり、その目的を達するという意味で必要であると思うのであります。

（平成八年五月八日　日蓮正宗法華講富士会館板御本尊入仏法要の砌　四五五号）

◇　◇　◇

しかし私は、宗門の真の僧俗の関係の上から、僧侶が指導教師として各地域に在って指導し、そしてまた、信徒の方々が法華講の立場において宗門を護持し、僧俗一体となって広布への折伏教化に向かうという態勢が、今日においてきちんと整いつつあるということを感ずるのであります。

その点からも、この慶祝記念の各事業を滞りなく完全に遂行することが、我々の仏祖三宝尊に対し奉る何よりの御報恩であるということを深く感じていただき、一人ひとりがこの事業の完遂に向かってあらん限りの力を出していくということを、心からお願いをしたいのであります。

その面において、特に宗門の僧侶、信徒の指導的立場に在る皆様方の自らの実践とともに、他に向かっての教導をよろしくお

願いをいたしまして、一言、本日の言葉とする次第であります。

（平成十年十二月十八日　第一回宗旨建立七百五十年慶祝記念局委員会の砌　五一六号）

創価学会破折

近年において、創価学会が宗門の一部に現れ、種々の立場から正法護持の志をもって折伏を始めました。これは一往、立派なことであり、その功徳は大きく増進したと思うのであります。しかしながら、そのなかから、特に第三代会長・池田大作の指導に入ってから、一番根本である、身をもって正法正義を護（まも）り弘宣するという「死身弘法」の志を忘れて、創価学会というものが中心であり、総本山の教えはむしろ従であるというような考え方のもとに、種々の方策や在り方が変節していったのでありま

す。

これに対して、御先師日達上人も非常に心を悩まされ、心を砕かれて、創価学会の意味におきまして、

「日蓮正宗の教義でないものが、一閻浮提に広がっても、それは、広宣流布とは言えないのであります」（蓮華　三九号四ページ）

ということを仰せでありました。こういう問題を種々に裁いていくことが、時において、最も必要でありました。

日達上人は、お亡くなりになる年の昭和五十四年五月三日、創価学会の謗法を戒められて、今後は一切、宗門に付き従って法を護り、広布に向かうという約束のもとに創価学会を許されたのであります。

その三カ月後に、生前のお約束によりまして、私が跡をお受けするような形になりました。故に、私といたしましては、あくまで御先師の決められた約束と在り方を忠実にお受けして、法を護持していくことが大切であったのであります。

したがって、その時においては、創価学会においても志を新たにして宗門に付き従うということを言っておりましたし、また、御先師の御指南もそのとおりでありましたから、私としては創価学会を守り、正しく指導していきたいという気持ちをもって、昭和五十四年の八月以降、行ってまいりました。

その時に、その在り方に反乱をして逆らったのが、いわゆる自称正信会の者達であ

りました。これは、一言もって言うならば、「仏法は時によるべし」（御書　五七八ページ）ということであります。大聖人様が、一往、『立正安国論』においては天台、真言等の破折を控えられて、佐渡においであそばしたのちに、発迹顕本という境界の上から、さらに真の法華経の怨敵（おんてき）たる真言、天台等を破折あそばされた如くに、時によってその破折の形がはっきりと顕れるのであります。いわゆる「大智慧の者ならでは日蓮が弘通の法門分別しがたし。然る間、まづまづさしをく事あり。立正安国論の如し」と仰せの如くであります。

私は、大聖人様の弟子として、その徳は百万分の一にも至らない者ではありますけれども、大聖人様の御指南を体しつつ、その時に随って、破折・護持の姿を明らかにしてまいったつもりであります。

ですから、しばらくの間は、創価学会、池田大作等を正しく導かんがために心を砕いてまいりました。しかし、本来、その本性・本音が謗法の姿として持っておる者どもでありましたので、結局、池田中心、創価学会中心というところに仏法の本義を乱してしまったのであります。そういうところから、様々な現証が起こってきた関係上、平成二年以来、その問題に対して、宗門はきちんとしたけじめを立て分けてきた次第であります。

ですから、正信会の者どもが独走し、御先師が決められた轍（わだち）を乱して創価学会を打ち破ろうとした姿は、まさしく時と機を知

らなかった姿であります。彼等は、「自分達がやったから、日蓮正宗もまた、それをまねしたのだ」というようなことを言っております。しかし、それは大きな誤りであります。これは時に随って初めて、真実の正法正義とともに、真の破折の姿が顕れてくるのであります。

今、宗門がここに僧俗一致して正法広布を目指しつつ、邪義・池田創価学会を破折するに至ったことこそ、本当の時を得たところの姿であります。したがって、今こそ創価学会の謗法を徹底的に破折していくべき時であります。

ただし、この破折ということは、けっして創価学会を、あるいは池田大作を憎くて言っておるのではありません。彼等は私どもを徹底して憎んでおります。本当か嘘かは知りませんけれども、池田大作が「日顕を針金で結わいて、頭を何かで殴ったら、気持ちがいいだろう」というようなことを放言したと、遠くのほうから聞こえてきたことがあります。

しかし、私どもは違います。私はけっして池田大作を憎んでおりません。池田大作もまた、仏性を持っておる人間であります。ただ、その謗法については、はっきりと指摘し、打ち破っていかなければなりません。

創価学会の人達にしても同様であります。池田をはじめとする職業幹部にだまされ、創価学会のあらゆる意味の仏法に対する壊乱、誤りのなかに閉じ込められておる人達に対して、大聖人様の大慈大悲を拝し

つつ、慈悲の上から、一人でも多くの人を救うべく、謗法を打ち破らなければなりません。打ち破れば、その人は必ず正しい法に目が開き、正しい法のなかに身を置くようになるのであります。その大聖人の大慈大悲を拝して、我々はしっかりと進んでいくことが肝要と存ずるのであります。

特に池田大作をはじめ、創価学会の現在の姿は、大聖人様が末法の御本仏としてお顕しあそばされた、宗旨の根幹たる三大秘法を破壊するものであります。

また、大聖人様は、教・機・時・国・教法流布の前後等の種々の御法門について、それらを五百有余の御書のなかに縦横無尽にお示しあそばされております。しかし、それらはことごとく末法の仏法の精髄たる、本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目という三大秘法を顕しあそばされるところにあったのであります。したがって、本門三大秘法こそ、大聖人の仏法の中枢であると同時に、日本国乃至、世界の人々が末法万年にわたって即身成仏という大利益を得るところの尊い大法であります。

ところが、この三大秘法について、まず本門の本尊に関して大謗法を犯しております。ただし、ここではその内容は省略いたします。

本門の戒壇については、過去の池田大作の正本堂の意義等についての所業が大謗法であることを、私は今までに色々と折に触れて申しております。これら池田の種々の大謗法の実態を将来に向けてはっきりと示

し、宗門からすべて駆逐していかなければならないと思っておる次第であります。これについても内容は省略いたします。

残るところが本門の題目でありますが、心に本門の本尊を念じ、信じて題目を唱えるところが本門の題目であります。全く別な、誤ったものを念じてお題目を唱えても、それは本門の題目にはならないのであります。ところが、創価学会では、池田を心に念じてお題目を唱えるというような指導が行われているやに聞いております。皆さんも聞いたことがあるでしょう。あるいは以前にそのようにやってきた方がこのなかにもいるかも知れません。しかし、このような狂った誤りはありません。

日寛上人の御指南にもありますように、南無仏、南無法、南無僧という本門下種三宝を念じてお題目を唱えるということが基本であります。ただし、これはあくまでも基本であって、そのほかにも、あなた方が現在ぶつかっておる問題、あるいは実現を願っておる問題を、心から念じてお題目を唱えるということは構いません。それは御本尊様の功徳を信じて念ずるのですからよいのです。ただ基本は、あくまで下種三宝を念じ、一遍いっぺんのお題目を唱えるというところにあります。

池田大作などという、名聞名利に凝り固まった、大謗法の者を、仏様のように心から信じてお題目を唱えるならば、その人は必ず地獄へ堕ちなければならない。そういう不幸な人達が学会員なのであります。

したがって、皆さん方が縁のあるところには、大慈大悲の大聖人様のお心を深く体して、折伏、再折伏、特に再折伏に精進をしていただきたいということを、この総会において申し上げる次第であります。

（中略）

毎日の生活は唱題を中心としてやっていくところに存するのであります。

ですから、先程も私の言葉を引かれておっしゃっておりましたが、今日は「十分間唱題」ということを、皆様方に申し上げたいと思います。

これから大事な問題があり、そこへ向けて家から出るまでに時間が十分あるとします。この十分間を真剣に唱題してみる。自分自身の生活を妙法の広大な功徳をもって試みるということが大切だと思うのであります。こういうことが本当に行われ、その得難い体験を一人ひとりが得ていくところには、地に足の着いた広宣流布の確信が、皆様方一人ひとりの命のなかにも生じ、また、それをもって多くの人を導いていけるのであります。

コップのなかに水を一杯に入れ、さらにそこへ水を注げば必ず外へあふれます。そのように、皆様方の命、生活のなかに、妙法唱題の功徳が真に入りきったならば、必ず他に向かってこの妙法の功徳を「五十展転隨喜の功徳」として示していくところの姿が顕れると思うのであります。

（平成九年三月三十日　法華講連合会第三十四回総会の砌　四七五号）

魔の用きを打ち破る

大聖人様の、

「異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶ふ事なし」（御書　一三八九ページ）

という、宗門の僧侶、御信徒であればだれでも知っている有名な御文がありますけれども、このことを正法護持の上に実際に行っていくことは本当に難しいのであります。特に正法に対しては魔が入るということがあります。そして、魔が様々なところから、正法を護持せんとする僧俗の和合を妨害しようとする姿があります。それが場合によっては僧侶の心のなかに入り、あるいは一部分の信徒の方の心のなかに入る場合もあります。さらに外から様々な災難として来る場合もあります。このように魔の用きは実にたくさんありますけれども、僧俗が真に正法を護持しようという大きな目的において団結していくときには、一切の障魔を破折して、立派に正法護持乃至、広布への正しい前進が実現するのであり、私はこのことを様々な実例から感じておるのであります。

（中略）

今、世の中では、政治面や経済面、その他様々な面で、多くの人々が精神面や道徳等において行き詰まり、あるいは様々な腐敗堕落のなかからの不幸な事件も至る所で

起こっておるのであります。これらは大きく見れば、正しい仏法を無視することにより様々な邪法が色々な毒薬の用きを生じて、そこにおいて多くの人々が苦しんでいるのであり、私どもはその姿を明らかに観ずることができるのであります。

ですから、日蓮大聖人様の正法を護持する日蓮正宗の僧侶ならびに信徒の皆様が、一切の人々を一人ずつでも救っていくことが大法弘通の本当の意義であり、また日本乃至、世界広布へ向かって前進する宗門の一員として、いよいよ精進すべき必要があると思うのであります。

一人の方が本当に正しい信仰に目覚めれば、それだけ世の中が明るくなるのであります。それが、間違った教えや無宗教の、人間の様々な欲望による腐敗堕落のなかに泥(なず)んでおれば、いつまで経ってもこの世の中はよくなりません。ですから、日蓮大聖人様の教えは本当に一切を救っていく教えであるということを、我々は改めて確信すべきであります。

（平成十三年四月十一日　本地寺本堂新築落慶法要の砌　五七二号）

青年の信心

御本尊の中央、南無妙法蓮華経の直下に日蓮在判と示し給うのは、大聖人様の一心一念が法界に遍く充満する妙法蓮華経の境界、いわゆる久遠元初自受用身即末法の下種本仏日蓮大聖人究竟の悟りのお姿であります。すなわち、法界を自身と開く大聖人即宇宙法界、法界即大聖人の境智を示された御本尊として、我々日蓮正宗の僧俗は無二の信心をもって拝し奉るべきであります。

要するに、仏道の根本的な悟りとは何か。それは一心即法界と開く悟りであります。そこには、他に肩をならべるなにものもない大人格が存するのであります。故に妙楽大師は、

「成道の時此の本理に称ひて一身一念法界に遍し」（御書　一〇六ページ等）

と喝破しております。

また、大聖人様は、

「所詮一心法界の旨を説き顕はすを妙法と名づく」（同　四五ページ）

と仰せられ、さらに『御義口伝』に寿量品自我偈の文について、

「法界を自身と開き、法界自受用身なれば自我偈に非ずと云ふ事無し。自受用身とは一念三千なり」（同一七七二ページ）

と、本仏究竟の悟りを御指南であります。

御本尊の当体としてこのところを如実に拝するのが、我ら信心の究竟のところであり、したがって、これから申し述べることこそ、皆さんの信心生活にとって大切なことと信ずるのであります。

なかなかに信じ難いことですが、人々の一人ひとりの命、その一念には本来、法界に遍満する自由自在な妙法の性を備えております。ただし無始以来、無明という煩悩に弊われて、この悟りを全く知らず、低い境界に迷っているのです。故に、無二に御本尊を信じ奉り、一心一念即宇宙法界と開かれた大聖人様の御法魂に対し奉り、真剣に題目を唱え、我が一心一念もまた、御本尊と境智冥合の大利益を蒙り、法界に遍満する広大な心なり、と信ずることが即身成仏の直道であります。

もちろん、御本尊を信ずる一念にこの境界はすべて含まれておりますから、この広大無辺な心を意識的に持たなければならないということではありません。生活上の種々の目的のため、折伏のため、現世安穏のため、後生善処のため、あるいは種々の希望や欲求満足のために、御本尊に向かい唱題することもまた、至極、結構なことであります。しかし、知ると知らざるとにかかわらず、どんな小さな利益も罰も、大きな利益も罰も、その元はすべて一心法界に遍満し、通ずる妙法の利益と罰であり力用であります。そのところをしっかり掴まえておけば、いかなることが起こっても動かず、恐れず、揺るぎない確信が生ずると信

ずるものであります。

このように正しく御本尊を信ずる者は、我が一心即法界なる故に、自由自在の境界をおのずと開かれ、心が広く豊かで、自然に喜びの心があふれてきます。境界が一転すれば、あらゆる人やものに対する見方が変わるのであります。恐ろしかった人が急に幼く見えたり、今まで気づかなかった人の値打ちを新しく感ずる等、対人関係においてもおのずから人々の姿をゆとりを持って正しく見るようになる。また、不平・不満や暗い苦悩の生活が、いつとなしに喜びと希望に変わっていく。そこからまた、折伏の心、人を本当に思いやる心が出てまいります。しかし、その元はすべて妙法受持の信心でなければ本物ではありません。かくて、すべての人に妙法の功徳を語りつつ、共に幸せになっていく仏法の上の修行こそ、広宣流布の要諦（ようたい）であると思います。

ただし、世間の人々はその元の正しい妙法の在り方を信ずることができず、それぞれ雑多な小さい人生観、世界観、宗教観による思い込みに執われているため、そこより起こる不完全な、不幸な因果によってあるいは悪を行じ、あるいは堕落しております。

かの池田創価学会が大聖人仏法の根本を見失い、背いて邪宗教に転落したのも、憍慢によって仏法の本源を軽蔑し、元から離れたところにおいて学会中心という小さな自我に執着したからであり、まことに哀れな者どもであります。

根本の正しい妙法に縁するところ、あらゆる苦悩を乗り越え、その時どき、事ごとに応じて自由自在の対応をなし、安楽と喜びの境地に住しきれるのは、一心法界の妙法に宇宙人生の一切を含むからであり、すなわち法界のすべて、十界三千の数多（あまた）の内容を具えるからであります。

したがって、時間、空間に一如する法界の真理を悟られた本仏の力と智慧を、その一身に信行によって涌現できれば、また他の一切の思想、宗教、格言等における行いより勝れた境地を具え得られるのであります。いわゆる人法一箇の大御本尊に対し奉り、妙法を受持し、一心法界の境地を受け継ぐ功徳は、大にして多、多にして勝であり、この大・多・勝の功徳を確信して妙法を唱えることが肝要であります。

しかし、我々はお互いに、一人で生きているのではありません。家族、知人、朋友その他、多くの人との関係において生活をしております。世間では、謗法の罪業により濁りのなかに囚（とら）われる不幸な人が充満しております。しかれば、本仏大聖人の大仏法により日々夜々、功徳を成就する境界より、この周りの人々へ正法正義の信仰を語り伝えることこそ大切であり、すなわち、それは折伏の実践であります。

今や宗門は平成十四年の宗旨建立の大佳節に向かい、大法世界広布への堂々たる歩みとして、三十万総登山ならびに奉安堂建立の二大事業の完遂に僧俗一致の大前進を行いつつあります。

本日参集の男女青年の皆さん、この未曽有の青年部結集を機に、皆様方一人ひとりが一年に必ず一人以上の折伏を成就して、広大なる下種本仏宗祖大聖人の仏恩報謝に供え奉り、青年に、より多く恵まれた大活力をもって、それぞれの法華講支部のなかに在って広布の先駆を切っていかれることを強く期待したいと思いますが、皆さん、いかがでありましょうか。

そして、本年四月二十八日の奉安堂着工法要の日より百日間、一日三千遍として三十万遍の大願成就のための唱題も、多忙なる生活のなかに在って時間に工夫をこらし、願いとして叶わざるなき功徳の実証を確信し、この浄業をしっかり成し遂げていこうではありませんか。

（平成十二年四月二十三日　法華講連合会全国青年部大会の砌　五四八号）

全国から一万五千余名の青年部員が
結集した昨年の全国青年部大会

正しい筋道による前進

今、世間は御承知のとおり、経済界、政治界においても、実に混迷・混乱の様相を呈し、四分五裂、七花八裂の状態であります。これは、それぞれのところに抱えておる邪義・謗法の根本がどこにあるかということを知らないために、それを自らの我見・我意をもって正義を表そうとしておるからです。

しかし、一切が元を忘れておる故に、それらの形が謗法の姿となって混乱・迷乱の形として表れてきておると思うのであります。

それに対して我が宗門は、先般来、正しい「時」の上からの仏法の筋道にのっとり、正しい前進をしておるということをつくづく感ずる次第であります。

平成二年に「三万総登山」ということを打ち出しました時に、果たしてこれが達成できるか否かということが、一往、当時として問題でありました。しかしながら、僧俗の真の護法の精進によって、実に立派に三万総会を開催することができました。

それから四年後の平成六年には「六万総登山」という大行事がありましたが、これもことごとく立派に目的が完遂できたのであります。

さらに四年後、それが本年の平成十年であります。この平成十年に新客殿が落慶し、

その慶祝に当たって、信徒十万の方々が登山をするという、この時に当たっておるのであります。

さらに四年後が、平成十四年の宗旨建立七百五十年というような姿で推移することは、今日における日蓮正宗僧俗の、まことに妙法流布の時を得た、揺るぎない広布の前進であるということを、我々は深く感ずる必要があると思うのであります。

昨年の「充実の年」から本年の「革進の年」へと移り変わりましたが、この間において、それぞれの年にしっかりとした根を張り、やるべきことの功徳を成就しながらことごとく行っておることをつくづく感ずるのであります。

その大きな姿としては、昨年度において、法華講各支部の充実・発展が、実に過去にない、目覚ましいものが感ぜられました。

ある支部は、平成三年に五十数世帯で発足しましたけれども、昨年の「充実の年」の平成九年に、ついに千世帯を突破したという報告を、昨年の終わりに、その寺の住職と講頭等の登山によって聞きました。その他、千世帯になんなんとする支部、さらにそれを越した支部もあることを、ほかにも多々聞いております。

さらに小さい支部においても、それぞれが行うべき自行化他の推進を以前よりさらに力強く行っておるということ、また、あらゆる寺に法華講支部を組織することができたということ、これらも日蓮正宗の正法広布の真実の姿として表れておることを感

ずるのであります。

ひとえにそれらの元は、大聖人様があらゆる御書において、南無妙法蓮華経と唱えるべしということをお示しになり、また、自らもお唱えあそばされた功徳であると存じます。

「正は妙なり。妙は正なり」（御書　五四八ページ）

という御金言がありますが、世間の人々は正しいことを求めつつも、本当に何が正しいことであるかを知らないのであります。

特に末法においては、妙法蓮華経こそ真の正法であり、それは世の中のあらゆる思想、道、宗教の内容のすべてを込めた一番の元であり、本地甚深の奥蔵であります。

したがって、南無妙法蓮華経と唱えるところに、どれほどの功徳が存するかは仏様でなければ解らない。凡夫の頭ではけっして解りませんけれども、末法の今日、真に本門の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱え、仏法弘通、また仏道修行に励む功徳は実に大きいものが存するのであります。

この功徳によって、わずか数年の間に五十数世帯が千世帯を越えるようなことにもなるのです。これはただ単に数が増えるということでなく、一人ひとりが本当に妙法の功徳をもって、自らも幸せになるとともに、人をも幸せにしていく姿が如実に表れていると存ずるのであります。

（平成十年一月一日　平成十年元旦勤行の砌　四九三号）

実践の決意

さらに、皆様方は新年に当たって御本尊様に、この一年、できるべくんば一人以上の折伏をさせていただきたいという願いを篭めてお題目を唱えられたと思うのであります。これも、できない場合は仕方がありませんが、なんとか一人が一人の折伏を行っていこうというところの信念、気迫をもって進むことが肝要と存ずるのであります。

できないと思っておると、いつになってもできません。しかし、仏様の御命であるということを深く体していくときに、そのことは遠いところにあるのではなく、皆様方の足元に存すると思うのであります。

宝塔品に、

「諸人云何ぞ勤めて法の為にせざらん」

（法華経　三四七ページ）

という御文がありますが、これは仏様が末法に妙法華経を弘通せんがために、多くの菩薩方を策励されたお言葉であります。すなわち、この法のために、なんらかをなさんとするところの心こそ、お題目を実践する心であります。お題目を御本尊にしっかり唱え、その心掛けをもって進むときには、仏様の智慧が皆様方の信念のなかに必ず顕れてくると存じます。

（中略）

これは、また未来において、皆様方の命

のなかに、生活のなかに、奥の深いところから顕れてきて、皆様を菩提に導くところの尊い智慧の功徳であります。

これらはすべて、御本尊の広大な仏力・法力によるのでありまして、赤子が母の乳のなんたるかを知らずとも、無心に乳を飲むことによって自然に成長する如く、お題目を唱え奉るところ、おのずとその功徳が生じ、さらに、自他共に救うところの姿が顕れてくるのであります。

（平成七年一月三日　唱題行の砌　四二四号）

◇　◇　◇

唱題は、「やろう」という決意さえあれば、ごく簡単に行えるのです。ところが、「大変だ。とてもやれそうもない」と思うところには、少しの唱題もできないのです。それほど人間の気持ちというのは不思議なものであります。

どんなことでもそうですが、特にこの正法を護持興隆していくためには、まず、自行を充実させ、そして他に及ぼしていくところの化他が大切であります。

（中略）

「五十展転随喜の功徳」が、おのずと唱題行を中心に進んでいくのであります。

（平成九年一月十一日　末寺在勤教師初登山会の砌　大日蓮六一二号）

使命の自覚と遂行

このように考えていきますと、今度は我々の持っておるところの不幸の要素を逆に幸せの要素に、間違った考えや様々な濁った命を正しい命に切り替えていくところの宿業の転換ということがなければなりません。これが我々の信心の大きな目的であると思います。

だれでも不幸より幸福のほうがいいし、苦しみより楽のほうがいいと思います。そこから考えるならば、すべての存在が常に幸福で安楽でいられることを願いつつ、より強く、より正しい命の実現に向かって進んでいくところに、人間として生まれた本当の意義が存すると思うのであります。

東洋に「酔生夢思」という語があります。正しい教えを知らないで、お酒に酔っているようにふらふらと何も考えないで生活をし、漠然とした夢のようなことばかりを考えて、具体的な信念と行動がない姿のことであります。この日本の、また世界中の人々のなかにこれが多いと思います。

しかし、我々は「酔生夢思」ではなく、また自分自身の謗法、宿業の転換というところからもさらに一歩進めて、「使命の自覚と遂行」というはっきりとした考えを持たなければなりません。一人ひとりが「なんのために生きてきたのか」ということをよく考えてみると、皆様方一人ひとりに尊

い使命が存するのであります。「自分はどのような意味からこの世に生まれ、どのような意義において自分の使命があるのか」ということを自覚すること、そしてその自覚の上から、さらにその使命をしっかりと遂行していくことが大切であります。

ただし、これにも二つの道があります。一つはその全体を括った大きな道であり、もう一つは、一人ひとりの因縁に基づいて形成されるところの日常の生活、職業というようなもののなかに存するところの使命であります。

世間一般の人々は、後者の自分の生命、生活、職業といったところから得た様々な道において「自分がこの世の中に生まれた尊い意義を自覚しよう」、また「その道に進んでいこう」という考えがあると思います。しかしながら、それだけでは色々な意味において本当の自分を見つめ、また、自分の尊い命の値打ちを全面的に開くところには到達できません。

先程申しました「現在漫々の謗法罪障」の上から、様々な悩みや苦しみの原因が自己にあると同時に、それが外から色々な形で迫ってくるのであります。

なかには、欲ということに執われて、せっかく正しい道を進んできながら、本来の正しい筋道を見失ってしまう人もあるようであります。

人間が正しいことを行っていくなかにおいて、自然に自分に利益、利得が生まれてくる場合があります。しかし、それに執わ

れてしまうと、本来の目的であった自分を本当に幸せにする道、他人をも本当に幸せにしていく道をいつの間にか見失ってしまうのです。その一番大きな例が池田大作であり、創価学会であります。

今、これらの謗法に対する厳然たる罰がどんどんと現れてきております。しかし、「謗法は白癩病の如し」（御書　七一一ページ）と言われておりますとおり、いきなりすぐには現れてきません。初めはゆっくりだけれども、そのうちにだんだんと大きくなり、最後にはどうにもならないような、とてつもない不幸な状態が現れてまいります。

しかし、池田大作、創価学会だけがそうであり、我々は違うのだと油断してはなりません。皆様方の一人ひとりの心のなかの三毒、また十四誹謗のなかの一つに著欲謗法がありますが、欲に執著してしまうと、つい本来の正しい道を見失って、その欲の方向に走っていってしまうのです。しかし、人間は愚かですから、正しい道から外れてしまったことに、また、自分が実に不幸な姿になっていることすらも判らないのです。

お互いにこれは戒めてまいりましょう。私自身も、大聖人様が戒められた、憍慢、懈怠、計我、浅識、著欲、不解、不信、顰蹙、疑惑、誹謗、軽善、憎善、嫉善、恨善という十四誹謗について、常にお題目を唱えつつ、このことに陥らないように、そして皆様と共に本当に正しく大聖人様の仏法を修行させていただくことを祈っておるも

のであります。

この心をもって真の妙法を持っていくことこそが最高の使命であり、また、皆様方一人ひとりが大聖人様の南無妙法蓮華経を受けられたことがそのまま、本当に尊い使命の全部であるということをしっかりとお考えいただきたいと思います。そこに、あらゆる日常生活の使命の遂行も、真の幸せの顕現も存すると思うのであります。

ですから、一切の使命の元は、この妙法を受持したこと、そして、

「一文一句なりともかたらせ給ふべし」

（同　六六八ページ）

という大聖人様の御指南を深く体して、自行化他にわたる尊い妙法の功徳に邁進するところにあると思います。つまり、その心、その命をもって生活をすることが、生活の全体を包み、生かしていくところの根本であると確信するのであります。

（平成八年八月二十四日　第四回海外信徒夏期研修会の砌　四六二号）

御法主日顕上人猊下御言葉集

発行日　平成十三年七月十六日

編　集　「大白法」編集室

発行者　日蓮正宗法華講連合会
東京都墨田区吾妻橋一―十四―十一

印刷所　田嶋製本株式会社
東京都荒川区西尾久五―二十―二